

## まえがき

上の写真は昭和30年頃の山田(現、伊勢市)駅前の外宮参道の正面入口であるが、私はこの山田駅前通りをやり過ごした辺りにあつた常盤幼稚園の年長時に自転車通園していて、この辺りは通園路であつたためか、それともその後、外観的に大きな変化が小中学生になるまでなかつたのか、山田駅前の旅館群のことは比較的よく記憶しているようだ。

この辺りは戦災で焼失したと思われる所以、旅館群は戦前のように軒並み3階建ての旅館が立ち並んでいたということではなかつたようにも思うけれども、高千穂館や佐伯館などが記憶にあり、特に「宇仁館」(写真右側の3階建て建物)は駅の真正面にあって、宇仁館食堂の看板が店先に掲げられていたのが印象的だつたように記憶している。

子供の頃から、「宇仁館」をウニカンと読んできたし、周りの大人たちもそう呼んでいて、全く違和感をもつたことがなかつたけれど、右の引き札(飯田良樹氏蔵)を見ていただくと分かるように、古くは「ウニタチ」と呼んでいたようである。

この頃の「宇仁館」は、規模はある程度大きかつたが、旅館群の二軒といった感じであった。しかし、近世の歴史を調べてみると、この宇仁館

2. 宇仁館別館	神風館	41
3. 宇仁館別館	藤屋	50
4. 宇仁館別館	橘屋	53
5. 宇仁館別館	菊屋	57
6. 宇仁館別館	三日市旅館	54
7. 宇仁館別館	大橋館と対泉閣	53
8. 宇仁館別館	千秋楼	59
9. 宇仁館別荘	宮崎文庫	63
10. 高千穂館本店と支店	大橋館と対泉閣	66
参考1. 伊勢朝報社	宇仁館旅館の終焉	65
参考2. (株)志勢共同魚商会	宇仁館旅館の終焉	70
年表	あとがき	71
7	7	7
7	3	2
7	7	1
7	0	0

が権勢を誇った時代があつたことが偲ばれる。しかし、その歴史を明確に記録したものがないため、「宇仁館」の推移に関する、分かつている範囲で、憶測も含め記述してみたい。

参考文献は文中に記載していますが、写真を含め入手先を失念してしまったものもあり、「記載しない」とを真に申し訳なく思つております。また、掲載の写真は主に、山田修司氏の「プログ いにしえの伊勢」より、版画等は津市在住の郷土史研究家 飯田良樹氏所蔵品を掲載させていただいております。また、古い電話帳をコピーさせていただきました伊勢河崎商人館 西城事務局長にもご協力いただき、各位には誠に感謝しております。

なお、それぞれの年号は明治10年は明10、大正は大10、昭和は昭10と記載し、その年号の前の数字は西暦を表記している。



神奈川県平塚市真田3・10・18

秋田耕司

koji.akita@nifty.com

## 土器調製所としての『宇仁館』（伊勢国多気郡宇仁郷）

伊勢で「宇仁館」と言えば、駅前にあつた旅館を指すに違ひないけれども、まずは、「宇仁館」という言葉を伊勢で検索してみると、明30 伊勢たより参宮案内」に掲載されている、「宇仁館の由来」があり、「宇仁館のふりがな」として、「ニカン」と明記されている。内容を抜粋・現代文化すると次のようになる。

垂仁天皇の時代、皇女倭姫が天照大神を伊勢国多気郡佐々牟江に鎮座された時、伴の采女 忍比売 ウネメオシヒメが同郡大淀村（現在の土器調製所のある多気郡明和町蓑村か？）にて供進の土器かわらけを作り、神嘗祭を行つた。それ以後、大神は伊勢宇治に鎮座したが、采女忍比売は物忌職となつて同郡の宇仁郷に住み、蓑村の天毘良加アメノヒラカ山の土で土器を作り神宮に調進し続け、その子孫も同様に行つてきた。

神宮の三祭典の時、忌物を神宮正殿に納める壺型土器を、土器作人が長官に調進する場所を「宇仁館」という。同館裏には御器社があり、ここで奉安した後、神宮に調進する。古来、このような斎館は市中に数軒あつたが、移転したり廃絶したりして、現在（明30）では宇仁館のみとなつた。

この『宇仁館』という土器調製所と、旅館「宇仁館」の関係を示すものは何も無いが、物忌職となつた采女忍比売の子孫が御器「宇仁館太郎」となつた可能性はあるのではないかと推測するが？

# 宇仁館』の読み方

まえがきに記載した通り、明治初年に創業したと思われる旅館としての宇仁館の引札（宣伝用ラベルと解釈している）には、「テにたち」と記載されているので、読み方はそうであつたに違いない。

地図で宇仁館（一志久保町）と角屋（宮後町）のあつた場所の地名を検索してみると、以下のような推移がある。

明02 度会明細図では、宮後丁上タチと下之久保並木

明22 神苑会 外宮方面開苑地図では、大字宮後町（宇）上館町と大字「一志久保町（宇）並木（御札場）

明31 伊勢宇治山田全図では、宮後字上館町・字下 三三と 一志久保町字上 一志・下の久保

明33 神都実測図では、宮後町と下之久保

と、短期間に変遷を重ねている。明30 伊勢たより参宮案内』には、「館タチ町は、上古、禰宜、神官の斎館ありしより、かく名付けしなり。」とあるので、館を「たち」と読むのが当然だったと思われ、宇仁館は『テにたち』と読んだに違いない。しかし、同誌は、さらに、今は、両側に、数多の旅店を、建て並べ、宇仁館（うにくあんとフリガナあり）は、三階の西洋館にして、「云々」とあるので、明治中期には、宇仁館は「テにかん」と読まれていたのではないか?と思われる。

## 西田家について



旅館『宇仁館』の当主であった「西田貞助・周吉」や宇仁館チーンを支えた家族について調べてみた。

西田貞助 1849嘉永2～1913大02 64歳

新墓にある西田家の墓には、「貞助 近祖初代」と記述されているので、旅館『宇仁館』は、彼が開業したと推測できる。

昭9初版『伊勢度会人物誌』を参考してみると、生没年は前述通り。旅館宇仁館主と記述してある。1871明治04御師制度が廃止され、旅館『宇仁館』を開業させた当時、彼は25歳前後だったと思われる。住所は宮後一志久保とあるが、実際にはその町名はないので、宮後町と一志久保町の町境に所在していたものと思われる。また、宮崎文庫の火事に重要書類を取出すとの事蹟がある。周吉の経歴の中に、豊宮崎文庫を収蔵して」とあるが、貞吉の時代に「豊宮崎文庫」を取得していた可能性がある。その後、「豊宮崎文庫」は「宇仁館別荘」として、長く使用されていく。

平24版伊勢市史には、神都公同会は明31、元町長の村井恒蔵、山本伊兵衛、西田貞助』らによつて結成された政治団体である等々、あり、宇治山田町の政治にも大いに関与していたものと思われるが、町会議員ではなかつた。

明治34 私立宇治山田幼稚園発足直後、園主は西田貞助であり、彼の寄付金に依存していたもので、教育にも熱心であったのではないか。しかし、貞助時代の『旅館 宇仁館』に関する詳細事蹟は見つけられない。家族は、

妻 ちか 1853嘉永06～1924大13 71歳、

次男 吉郎 1887明21 1歳、

長女 千代 1879明12～1906明38 26歳。



## 西田周吉 貞助長男 1873明06・11月～1934昭09、62歳

『旅館 宇仁館』を伊勢の「大旅館チーン」に発展させた人物である。写真は『宇治山田市主催御遷宮奉祝神都博覧会誌』より転載した。

前述の『伊勢度会人物誌』には、西田貞助の子供、周吉に関する記述はないが、大04三重県紳士録、昭04宇治山田市史、平24伊勢市史、デジタル版日本人名大辞典+Plusなどを参照すると、以下の略歴が判る。

周吉の大正4年頃の住所は本町181の2。宇仁館経営者、伊勢朝報社(明32新聞創刊)社長、豊宮崎文庫を収蔵して、(株)志勢共同魚商会を大05設立し社長となる。商工会議所会頭、神都瓦斯会社取締役、実業俱楽部幹事、信用組合宇治山田庶民金庫理事長、ほか、明34宇治山田市会議員当選(28歳)、宇治山田市市会議長に大正09～13年、市参事会員、三重県会議員、大12県会議員議長に就任、と偉大な経歴が残っている。

平24伊勢市史には、西田は昭05神都博覧会の開催を強く推進したが、宇仁館という市内唯一の老舗旅館の経営者であり、同時に県会議長、市会議長をつとめる地方政界の大立者(北岡善之助、伊勢の博覧会男より)とともに

記載されているように、宇治山田市および三重県で実業界のみならず、政界でも華々しく活躍したことがわかる。大04三重県紳士録には以下のように記載されている。周吉の家族は、墓誌には以下が記載されている。

妻 ゆう(子) 1878明11～昭16 64歳、

長女 美屋(子) 1901明34～大05 17歳、

三女 ?きみ(子) 1909明42～大05 22歳、

次男 一郎 1903明36 1歳、

三男 茂雄 1911明44 行年1歳、

四女 ?紀子 1923大12 2歳

また、大04三重県紳士録には、このほかに、

次女 等子 明41生、

四男 大一大01～平17 91歳(独立の墓あり)

の記述がある。長男 一雄は後述する。

## 西田米太郎 1875明08～1921大10 46歳

米太郎の出自は判らないが、墓所が本家とは違った場所にあるので、分家、つまり次男以下の続柄、あるいは父親の代の兄弟の家柄などであるだろうことが想像できる。また、墓誌の生年から年齢的に周吉の弟(貞助の次男)か?とも考えるけれど、次男で「太郎」という名付けは疑問が残る。風説を聞いたことがあるようなこともあり、従弟ではないかと推測しているが? また、三日市大夫次郎家を宇仁館系列化するに当たって、家系の繋がりを強くするた

めに三日市家に養子に入つたという話を聞いたことがあるが、墓所の状況から、両家の結びつきはあつたとは推測されるけれども、入籍はなかつた。宇仁館チエーン旅館の支店を任されるなど、周吉の片腕として運営を大いに補佐した。

## 西田 一雄 1896明29～1956昭31 60歳

周吉の長男で、長年、宇仁館チエーン旅館の一つ、八日市場の宇仁館別館千秋楼を運営してきた。周吉没(昭09)後より、戦後の成長期まで、宇仁館チエーン旅館を維持した。

妻 ふさ 1896明29～1961昭36 65歳

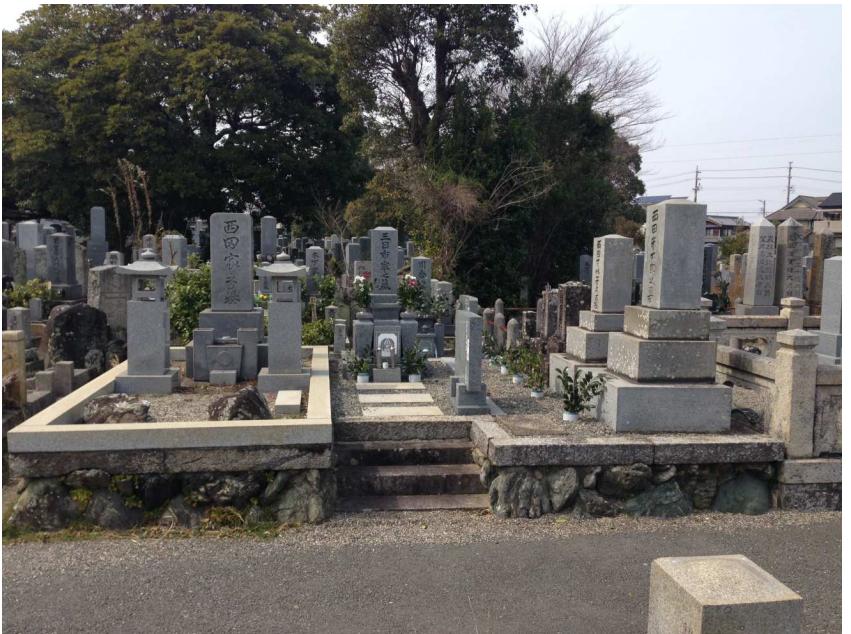
## 西田 正秀 1924大13～2004平16 80歳

一雄の長男で、一雄の後継として千秋楼を運営したが、宇仁館の終焉を看取つたのではないだろうか？



(上)西田本家の墓所 長男「一雄」の墓石が右側にある。(いずれも新墓にある)

(下)西田米太郎の墓が、西田分家?の墓所に向かい合つて建立されていて、その間に三日市家の墓所が有る。



# 外宮前』という言葉

それぞれの旅館の場所を特定するために厄介なのは、引札などに記載された「外宮前」という言葉である。外宮前は、一の鳥居前の豊川町、古市寄りの岡本町もあるし、北御門前の宮後町、二志久保町もある。

明治30 伊勢たより 参宮案内』には、

○ 館町は、上古、禰宜、神官の斎館ありしより、かく名付けしなり。今は、両側に、数多の旅店を、建て並べ、宇仁館は、三階の西洋館にして、其他、角屋、北村屋、今橋屋等あり。外宮前は、即、此所なり。北に月夜見宮あり。

とあるので、「外宮前」との表記は、必ず、北御門前を指しているものと思われるが、神苑拡張のため、明35 外宮北御門以西、2, 3旅舎（宇仁館、角屋神風館、等）が撤去され、宇仁館は明36頃には岡本町に再建を果たしてはいるが、明40 『重県案内』には、外宮前旅館 山田ホテル 宇仁館の広告を掲載していて、岡本町が外宮前であるとしていることから、その後の混乱をきたす原因となっている。

ただ、宇仁館は、北御門前の旅館として知られていたため、宣伝上もその表記を変えることは営業に差し障りがあるので、その表記を使い続けたのではないかとの推測しているが？

のちに、「外宮神苑前」と表現も出てくるので、それらの特定が難しいが、本書では、「外宮前」は北御門前（二志久保・宮後町）、「外宮神苑前」は一の鳥居前（豊川町・岩淵町・岡本町）と特定したい。

## 明治期の旅館概況

明04 御師制度廃止は旅館業の自由化を意味している。それに伴い、旧御師系旅館と町宿系の競争が始った。そこに御師に変わる「伊勢講社」が発足するなど、状況は大きく変遷した。明治期の関連事項を年表で記載すると、

- 明05 天皇陛下両宮参拝（2回目）宮崎文庫に宮崎郷学校開設
- 明06 大世古町 龍大夫邸にて博覧会開設
- 明09 旅籠屋取締規則の県令発布
- 明16 尾上町旅館十五棟が勅使斎館に定められる
- 明19 神苑会創設
- 明20 賀日館開館 皇大后御宿泊
- 明21 神苑開設のため、両宮付近の民家の撤去工事開始
- 明22 初回町會議員選挙
- 明23 太田小三郎等參宮鉄道株式会社創立
- 明26 『三重県下商工人名録』によると、參宮客の増大に対する旅館の数について、商人宿、木賃宿などを含めた全體数については不明であるが、宇治山田に13軒、（外宮前）①宇仁館、②角屋、③北村屋、（二志久保）④吸霞園、（尾上町）⑤藤屋、⑥十文字屋、⑦松嶋館、（古市）⑧油屋、⑨大安、⑩両口屋、⑪津の国屋、⑫麻吉、（宇治）⑬すし久、朝熊岳に1軒、どうふや、一見浦に2軒、角屋、清渚亭（後、一見館）、神社町に2軒、大崎屋、正丸屋、小俣村（田丸）に1軒、森正、が掲載されている。

公告した旅人宿業者数は35を数えた。このうち、○○太夫、○○神主の名で登録したものは17であったようだ。

明27 神苑会より既成神苑内宮宇治橋内と外宮の鳥居前)を神宮(献納

明29 宮川電気株式会社創立

明30 参宮鉄道が山田駅まで延伸 宮川電気が市内(電力を供給開始

明32 伊勢朝報社(山田駅前藤屋の隣にビルがある)新聞創刊。大世古町拝田墓地廃止認可、移転完了。

明33 山田駅前・外宮間の新道開通 五二会ホテル開業 この頃、山田駅前に一斉に旅館群が建築されたのではないかと想像している。藤屋も同様にその頃、尾上町から移転したと思われる。

明34 西田周吉 町會議員に初当選(28歳)

明35 外宮北御門以西の神苑工事着工 2,3旅舎(宇仁館、角屋神風館、もう一つは今橋屋か?)が撤去。

明36 本町(二見間)開通

明38 山田駅前(本町)開通 この頃と思われる写真にはすでに旅館群が形成されている

明39 内宮(浦口)まで延伸開通

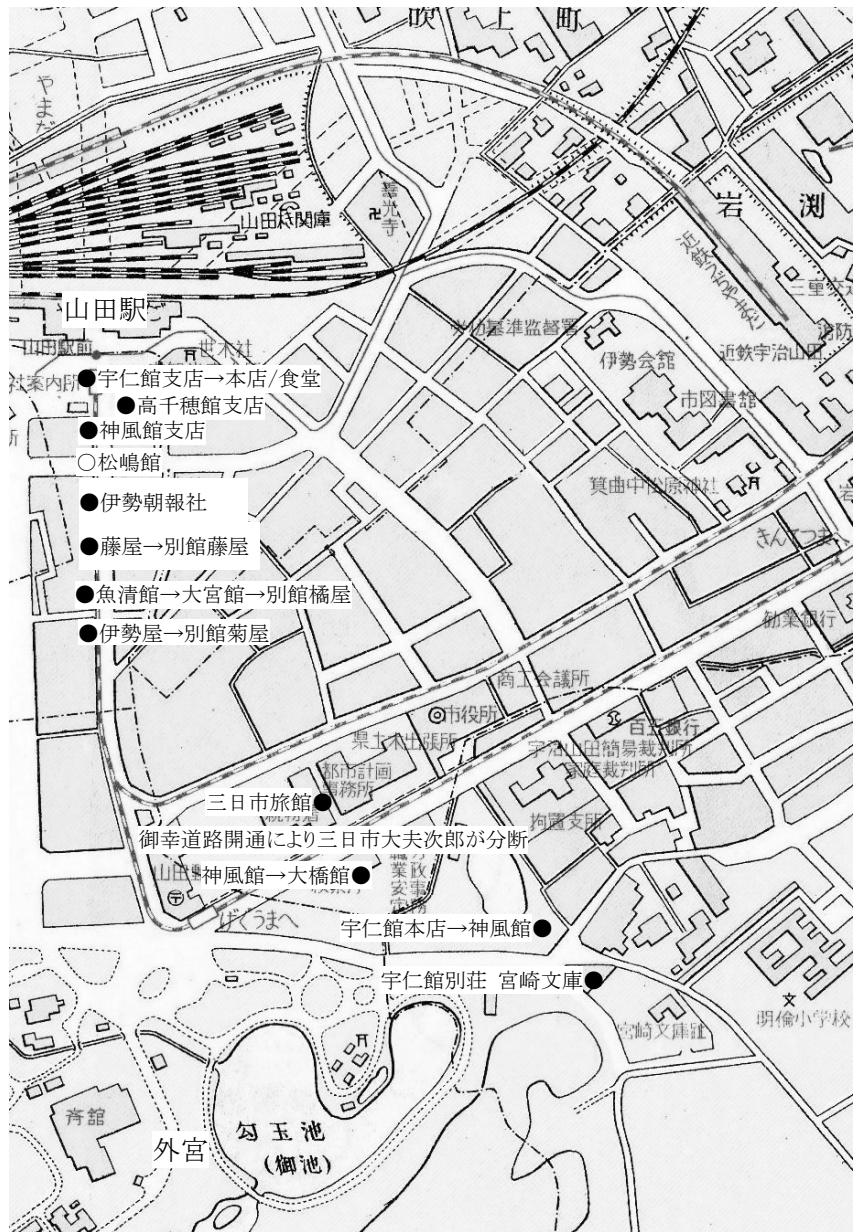
明40 内宮・二見間開通。五二会館は大日本ホテル山田支店となる

宇治山田市の資料によると、旅館は85軒、この座敷間数1,177、収容人員6,225人である。

明41 伊勢新聞(九月一日付)はこの期の遊郭について、古市に22軒、山田に29軒、神社に10軒の貸座敷業が営業していると報じている。

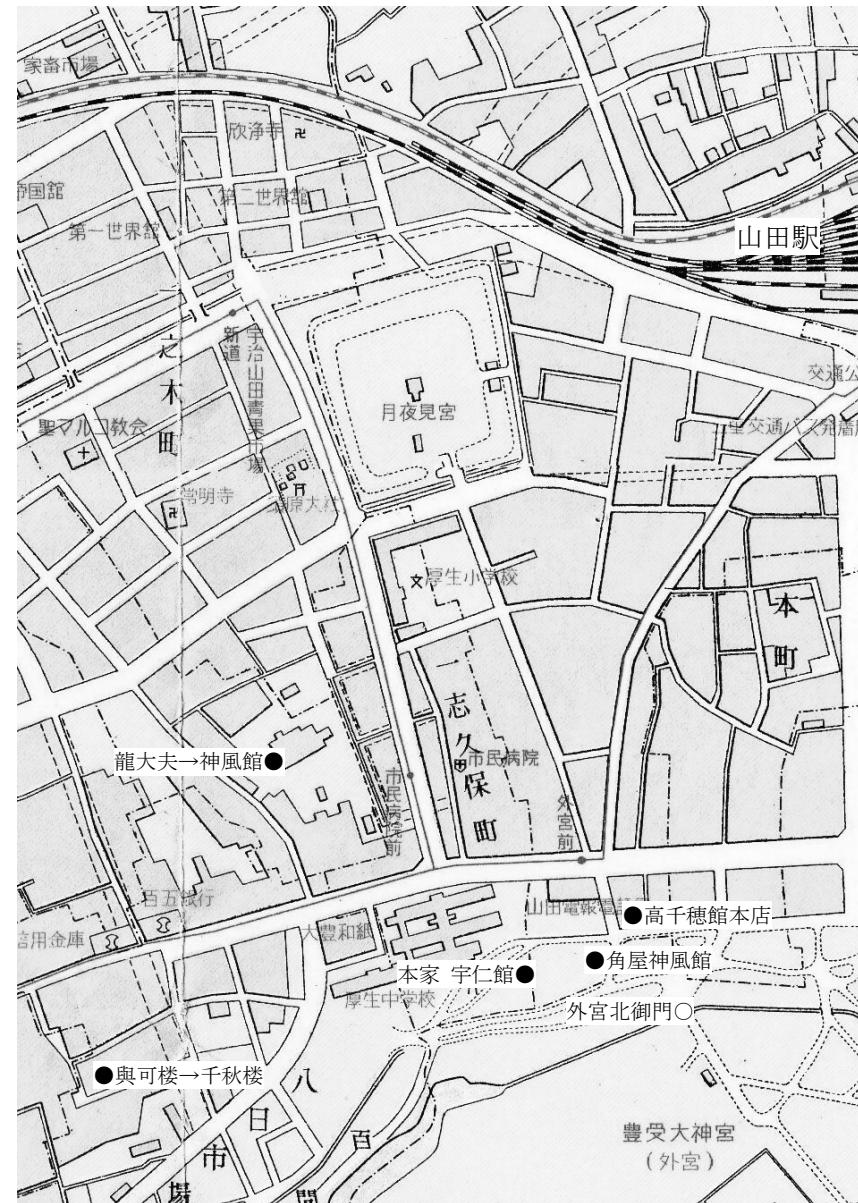
明43 御幸道路開通

明44 参宮鉄道鳥羽まで延伸開通。神苑会の土地建物 一切を神宮に献納し解散



## 宇仁館関連旅館 山田(現、伊勢市)駅前

# 宇仁館関連旅館 北御門周辺



## 旅館チエーン 宇仁館

宇仁館系列の旅館は数多く、その推移も激動しているために、それらを見極めるには山田地区の旅館を総合的に調査しないと全容の解明は果たせないが、資料も乏しく、推測の域を超えない所も多々ある。現在、解っている範囲で記述する。次の図は昭11「伊勢參宮之図」に記載されている「宇仁館 営業案内」であるが、この案内には次の通り、12店が掲載されていて、宇仁館チエーンの最盛期を表していると思われる。

宇仁館本店 山田駅前直右角3層楼(本町)

宇仁館食堂 本店階下(本町)

同別館藤屋 山田駅前右側3軒目近代的4層楼(本町)

同別館橘屋 同4軒目木造3層楼(本町)

同別館菊屋 同5軒目木造3層楼(本町)

同別館神風館 外宮神苑前(岡本町)

同別荘宮崎文庫(岡本町)

同別館三日市旅館 外宮前岩淵町

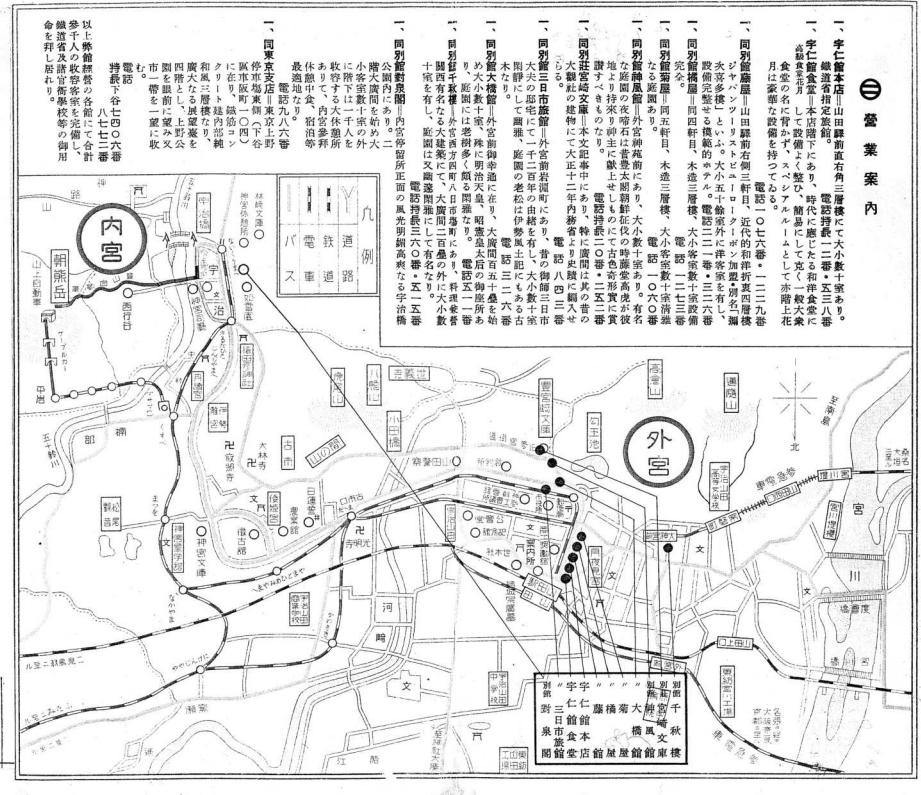
同別館大橋館 外宮前御幸通(豊川町?)

同別館千秋楼(八日市場)

同別館対泉閣 内宮停留所正面(宇治今在家)

同東京支店 東京上野停車場東側

## ④ 营業案 内



それぞれに名称が移り変わり、栄枯盛衰もあるため、次の店別に説明していく。

### 1. 宇仁館本店

2. 宇仁館別館 神風館
3. 宇仁館別館 藤屋
4. 宇仁館別館 橋屋
5. 宇仁館別館 菊屋
6. 宇仁館別館 三日市旅館
7. 宇仁館別館 大橋館と対泉閣
8. 宇仁館別館 千秋楼
9. 宇仁館別館 宮崎文庫
10. 高千穂館本支店

## 1. 宇仁館本店

### 御師としての『宇仁館』

僅かな資料しかないが、「内宮館町町家之図」、「宇治郷之図」の表記と「由田師職名帳」の記述には、100年程度の時代的な錯誤が見られるが、「宇仁館太郎」という平師職の御師が、江戸期に「宇治下館町」に存在していたことが認識できる。「内宮館町町家之図」には、布谷佐(左)大夫と宇仁館は「合家」したとあるので、その頃、二家を構えたのではないだろうか?また、平師職であったことは、1879明12「旧師職総人名其他取調帳」に「平民 宇仁館たけ」の記載から類推できるので、小さな御師邸を構えていたか、御師の代官や手代など勤めていた可能性がある。

地図の作成には時間が必要なのでタイムラグがあるのは地図の方ではないかと考えているため、御師「宇仁館太郎」は最初、宇治に居住していたが、その後、江戸中期頃か?山田「志久保町(外宮北御門前)に移住し、その後の「旅館宇仁館」の大きさは、今も残る丸岡宗大夫邸程度の、参宮客が宿泊可能な御師邸を構え、「宇仁館芳之助」から「宇仁館たけ」と継承され、明治初年頃までは活動を継続していたものと考えている。

関連を列記してみると、以下のようになる。

1743寛政03 「由田師職名帳」(瑞垣 第百十二号神宮司庁)

「志久保町に祓名 宇仁館大夫」、師職名

宇仁館大夫」の記載あり

の記載なし

1797寛政09

「伊勢路見取絵図 第二巻下 小俣・山田・宇治」(東京国立博物館)の下館町には「宇仁館大夫」

作成年不詳

宇治細見図（伊勢市教育委員会）には「宇仁館大夫」の記載なし

1830文政13 内宮館町町家之図（神宮文庫）の宇治館町に布谷佐大夫 宇仁館合家 平師職家」の記載あり

1861文久01 「宇治郷之図」（横地長重1849—1902作図？）下館町に「宇仁館大夫」の記載あり

大「夫」の記載あり

1864—7 元治慶応年間 由田師職銘監（瑞垣 第百十二号神宮司庁）—志久保町に祓銘 宇仁館太郎大夫・石井源大夫、師職名 宇仁館芳之助」の記載あり

1871明治04 御師制度廃止 旅館業の自由化を意味し、旧御師系旅館と町宿系の競争が始まる  
伊勢講社の発足（西田貞助 23歳）

1879明治12 「旧師職総人名其他取調帳」（外宮編15岩淵町）に、岩淵町276番屋敷同居 祓名 宇仁館太郎 平民 宇仁館たけの記載あり

1880明治13 「新講社 大和屋弥三郎」 広小路（外宮北御門前）うに館太郎の案内あり

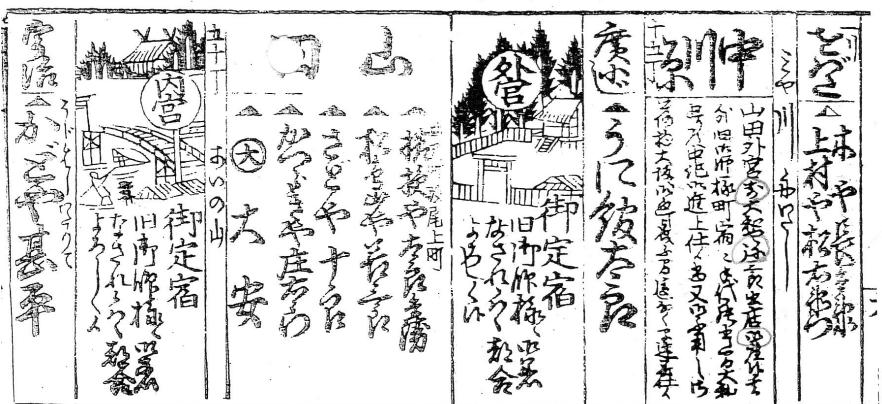
## 旅館としての「宇仁館」

しかし、1871明治04御師制度が廃止されたことにより、それまでの特権を維持してきた御師達はその行く末を種々とすることになる。三日市大夫次郎や龍大夫のように旅館として再出発した御師もいたが、町宿系旅館にその名跡を譲渡した者も多くいたと思われる。このような状況の中で、町宿系旅館を営んでいたと思われる「西田貞助」が、「宇仁館たけ」より「宇仁館太郎」の名跡を明治4年前後に買収し、「旅館 宇仁館」を誕生させたのではないだろうかと、「宇仁館たけ 岩淵町同居」の記述から推測するが？従つて、1880明治13 「新講社」の「広小路 うに館太郎」の案内は、西田貞助の「旅館 宇仁館太郎」あつたと推測している。ちなみに、「広小路」は北御門前を指すと考えている。

郎」の案内は、西田貞助の「旅館 宇仁館太郎」あつたと推測している。ちなみに、「広小路」は北御門前を指すと考えている。



（資料）（上）「内宮館町町家之図」御師廃絶130年記念シンポジウム実行委員会 平成14年発行「伊勢の町と御師」「伊勢参宮を支えた力」。字は潰れて確認できなかつたが、皇學館大学文学部非常勤講師 谷戸佑紀様にご指導を、（下）「新講社」帳は、津市在住郷土史研究家 飯田良樹様より資料ご提供、頂きました。

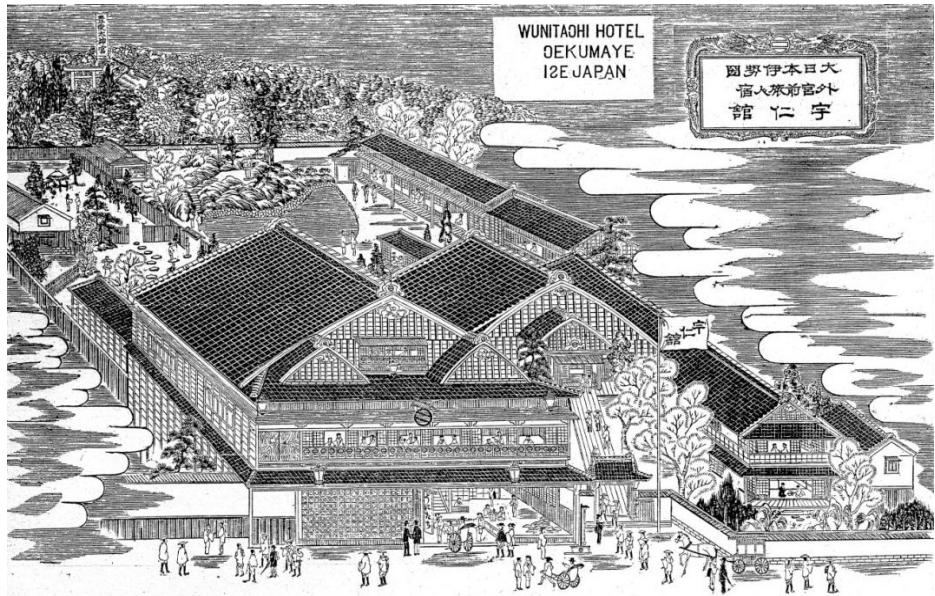


宇仁館本店について、繰り返しにはなるが、西田貞助の時代から推移をみてみる。

前述の「伊勢度会人物誌」から推測すると、明治初年頃、西田貞助は20歳前後だった。その頃の住所は宮後一志久保とあるけれども、宮後一志久保という町名はない。恐らく、宮後町と一志久保町の境にあつたということだと推測されるが、参宮鉄道が開通する前のことであるので、宮川を経由して参詣する人々の通行の便が良い、宮後町と一志久保町の境にあつた外宮裏参道である北御門前にあつたと考えられる。また、その頃に引札などの資料がほとんどない」とから、それほど大きくない旅館の一つであつたのではないかだろうか。そこで、その頃の場所を特定してみる。

上の版画(飯田氏提供)はその頃の姿を現しているのではない。これによると、左手奥に外宮正殿(丸印)が見える、道路に面した角地ではない、奥は外宮まで続いている場所にあつたと推定できる。余談になるが、この版画には、「大日本伊勢国外宮前旅人宿 宇仁館」、ローマ字は、「ウニタチホテル 外宮前 伊勢ジャパン」と記載されている。

一方、「三重県立宇治山田中学校 校友会誌」 神都に於け



る交通線の変遷と地域性の推移』杉原静 昭和10年3月発行に、明治20年頃北御門付近古今図があり、北御門前の旅館は12～3軒あつたとあるが、旅館の特定はないので、これにその他の情報を加味して、「神苑会史料」に掲載の神苑拡張前の地図、外宮方面参考図「永禄寛永寛文年間改修図」に、それらを当てはめてみると次頁のような北御門前の推測配置図が考えられ、明治20年頃までは北御門前はこんな感じだったのだろうと推測している。

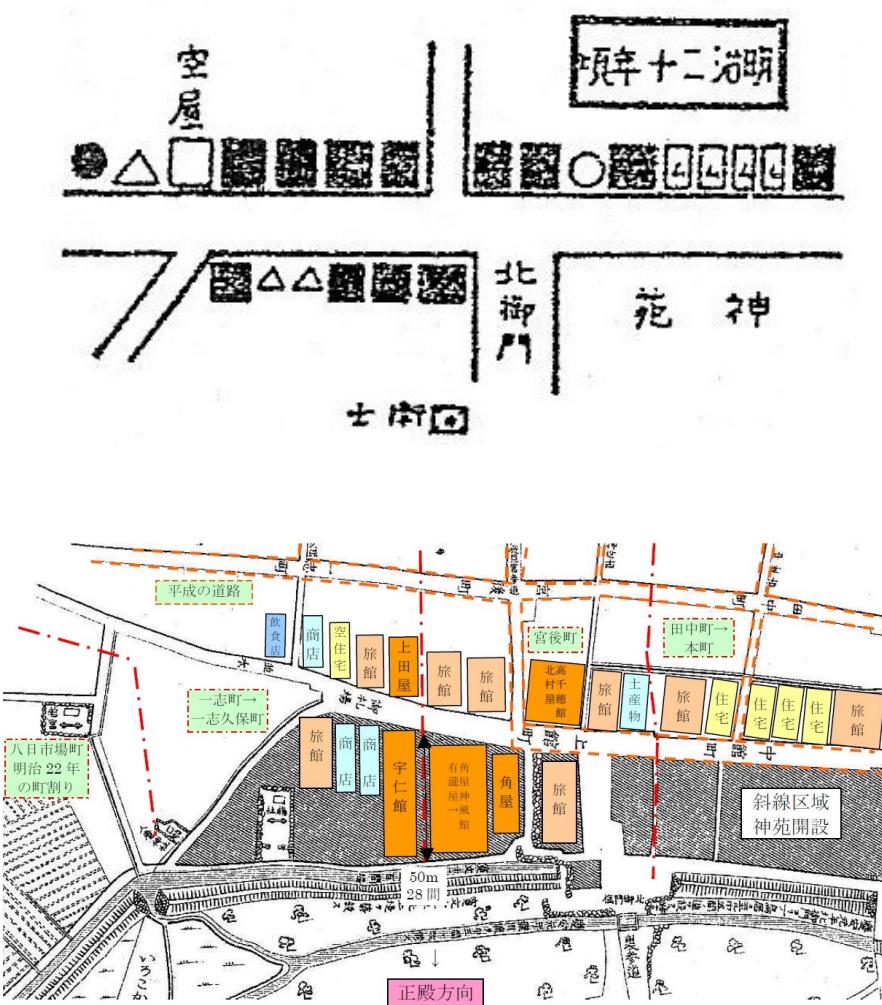
郷土史研究家の飯田氏からの「教授で、宇仁館については明31頃の伊勢新聞の商工登記公告に記載があり、住所は「志久保町3番屋敷」だったという。番屋敷は番地との相關がないため現住所との比定は難しいが、一志久保町にあつたことだけは明確である。町の境は一点鎖線で示している。

この推測配置図から、宇仁館の大きさを推測してみると、奥行は約50m28間くらいで、間口は15～20m8～11間か? そうすると、敷地面積は2000～3000坪1反、程度となる。

この値と前頁の版画と比較すると、印象的には合致するように思う。ちなみに、最大を誇る三日市大夫邸は、間口47・5m、奥行120mで敷地面積は1700坪強あり、それと比較すると、それほど大きくない旅館の大きさとして、あり得ると考えられる。

この地図に置いて、宇仁館は左端の旅館の位置にあつた可能性もある。

この版画以外に、この頃の宇仁館に関する情報はないが、同じく、北御門前にあった角屋に関しては、前述の飯田氏は「軒の角屋と神苑会」で、伊勢法務局の旧土地台帳や和紙図を次ページのように場所を特定している。それによると、



(上)北御門付近古今図 ■旅館 ○土産物屋 △一般商店 (下)北御門前の推測配置図

角屋和惣治は明治6年に人長大夫邸（上館町のち、宮後町35番地）を取得し、旅館業を開始し、明27、角屋は隣地（上館町36番地か？）の「有瀧屋」を買収して、家屋を新築して「神風館」と称した。（明34神都名家集）明28、「宮後町の角屋」は隣地（上館町33番地か？）に広大な旅館を新築し、「神風館」とした。（平24伊勢市史）などの記述があるので、（下）北御門前の推測配置図の場所にあつたに違いない。ただ、次ページの版画（上）は、北御門前の角にあり、参道に面している

増築後の玄関は、外宮正殿を後ろに見ていて、北向きに有る

を考慮すると、北向きの場所は上館町33番地しかなく、版画の方向とは一致しないし、間口も狭いように感じるなどの疑問があるけれども、「角屋」の位置としては、概ね、合致しているのではないかと考えられるため、まずは概略として、（下）北御門前の推測配置図を提示した。飯田氏の調査では、同区域の西側の一志久保に宇仁館はあったと言及はしているが、残念ながら、正確な位置までは言及がない。

高千穂館本店や上田旅館については、多少の別資料もあり、所在地が特定できている。

右側斜線部分には旅館等がなかつたのか、まだまだ疑問が残し、議論の余地がある。

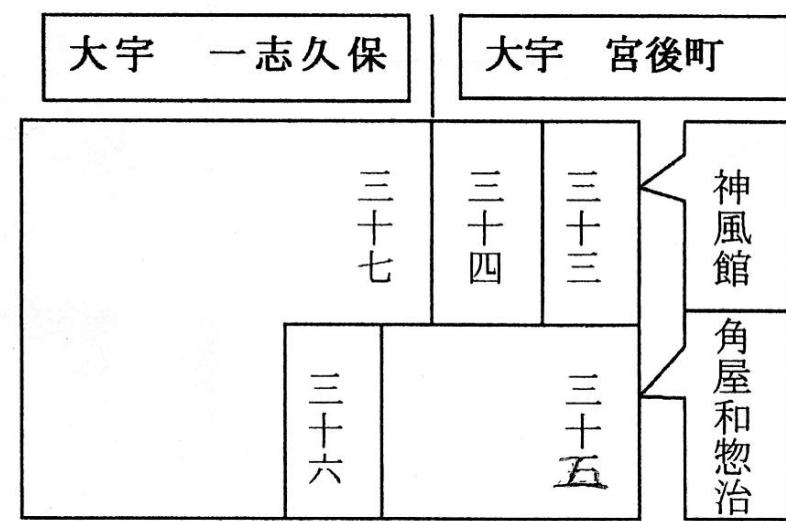
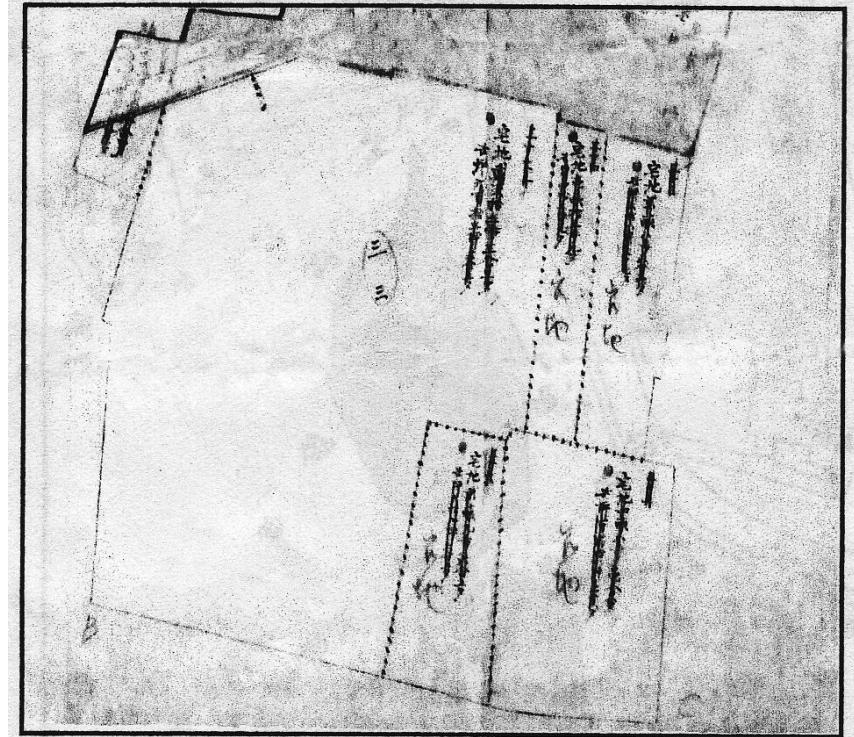
角屋神風館に関しては、宇仁館別館神風館支店の項で再述する。

増築後の玄関は、外宮正殿を後ろに見ていて、北向きに有る

を考慮すると、北向きの場所は上館町33番地しかなく、版画の方向とは一致しないし、間口も狭いように感じるなどの疑問があるけれども、「角屋」の位置としては、概ね、合致しているのではないかと考えられるため、まずは概略として、(下)北御門前の推測配置図を提示した。飯田氏の調査では、同区域の西側の一志久保に宇仁館はあったと言及はしているが、残念ながら、正確な位置までは言及がない。

(上)伊勢法務局の和紙図

(下)地籍図



### 明治中期の宇仁館 この時期、明治中期の関連記事を列挙すると、

明23 「三重県名所図会」旅籠屋として、油屋、藤屋、十文字屋、澤潟大夫、龍大夫、三日市大夫、福島三崎大夫、料理高有名楼として、興可樓、浅吉、吸霞園、すし久が紹介されているが、宇仁館はなく、それほど大きくなかつたと推測される。その他、古市有名楼として、備前屋、杉本屋が記載されている。

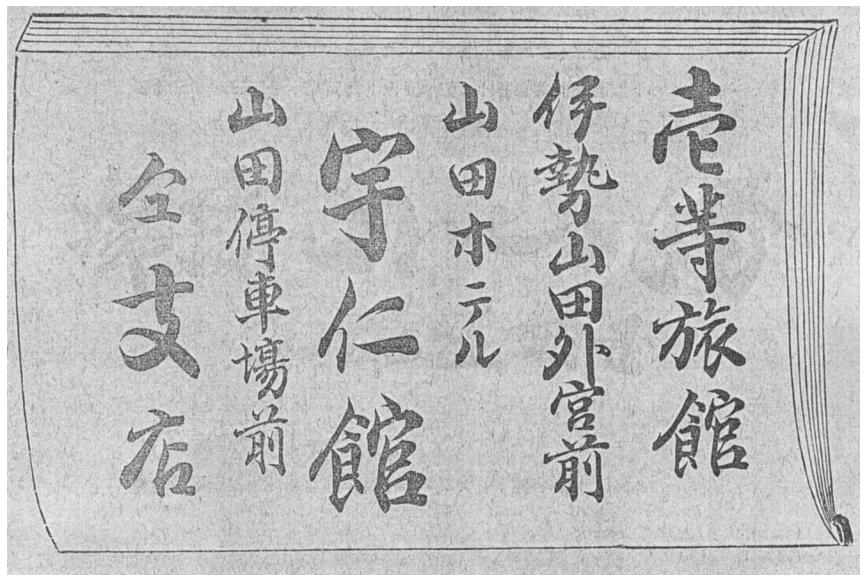
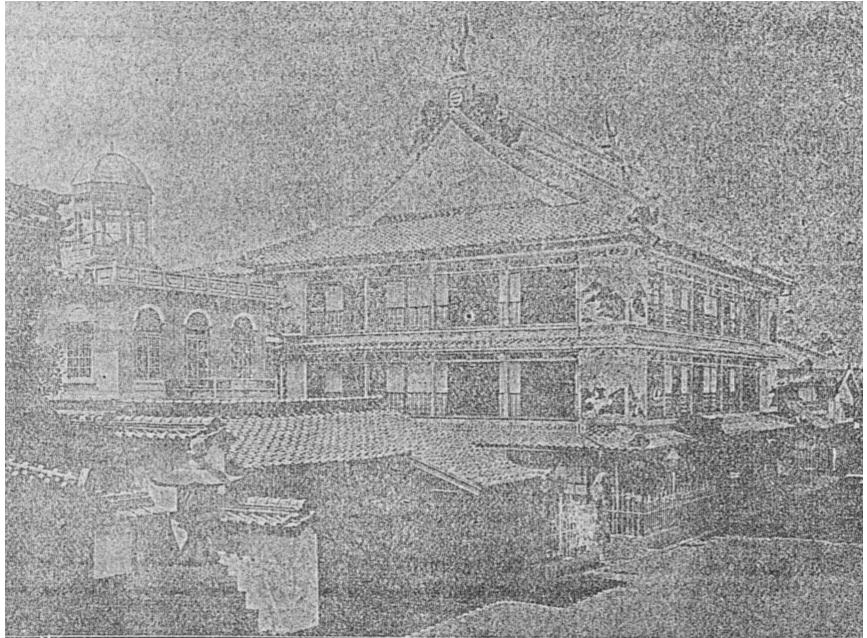
明26 「三重県下商工人名録」旅館兼料理店 外宮前 宇仁館」と記載されている。その他旅館としては、油屋、大安、角屋、藤屋、北村屋、十文字屋、松嶋館、両口屋、津の国屋が、料理屋としては興可樓、吸霞園、戸田屋、麻吉、すし久、くめかんがある。

明30 参宮鉄道が山田駅まで延伸 宮川電気が市内へ電力を供給開始

伊勢たより参宮案内「館町旅店として、宇仁館」、角屋、北村屋、今橋屋、花街として、津島屋、新川楼、料理屋として、戸田屋、鶴屋、新町妓楼として、湊屋、吉野屋、料理店として東雲楼が紹介されている。明30頃、平24伊勢市史「経営者となつた周吉は、参詣客の益々の増加を見越して、同年、隣地に客室70余を有する洋風の建物を新築。自家発電による電灯を点けた。

次ページの写真は明36 関西参宮鉄道案内記の宇仁館の広告のページに掲載されている写真である。大変不鮮明だが、角地ではなく、通りに面した方向に玄関を持つ3層楼があり、左上に塔がある洋風の建物が見える。この写真が、一志久保町にあった宇仁館本店の洋風建物が併設された時のものではないかと推測される。明31 伊勢新聞 商工登記公告によると、宇仁館の住所は一志久保町3番屋敷、代表者はすでに西田周吉に変更されており、貞助49歳、周吉25歳の頃に経営権の委譲があつたと思われる。

(上) 明36 関西参宮鉄道案内記の宇仁館広告 山田ホテルと称している。駅前に支店あり



## 明治後期の宇仁館

明32 伊勢朝報社（山田駅前藤屋の隣にビルがある）新聞創刊

明33 山田駅前・外宮間の新道（現、外宮参道）開通。外宮神苑拡張のため角屋神風館と宇仁館など数戸の邸地が神苑内に編入される。（明34神都名家集）神苑会史料にも同年、立ち退き契約が締結され、明35には撤去が完了したとある。五三会ホテル開業。

この頃、山田駅前に一斉に旅館群が建築されたのではないかと想像しているので、宇仁館も支店を出店したのではないか？しかも、駅前の角地を専有できたということは他に先駆けて、いち早く出店したとも思われるが？、藤屋もこの頃、尾上町から移転したと思われる。

駅前からの順番は、宇仁館支店、神風館支店、松嶋館（尾上町）、伊勢朝報社、藤屋。

明34頃 建ち退きに備えるために、三層楼の宇仁館分店（岡本町）を開業したと思われる。

**御師講社の旅館案内**には次のような記述がみられる。

由田外宮前 山田ホテル宇仁館、同神苑前 宇仁館分店、同ステーション前 宇仁館支店

この中の、「外宮前」とは前述特定の通り、北御門前のこと、これまでの本店を指し、神苑前というのが岡本町のことであり、同神苑前 宇仁館分店は、岡本町に新築した新店ではないか？双方が両立していた過渡期を示していると思われる。同時期に駅前支店は営業を開始したものと思われる。

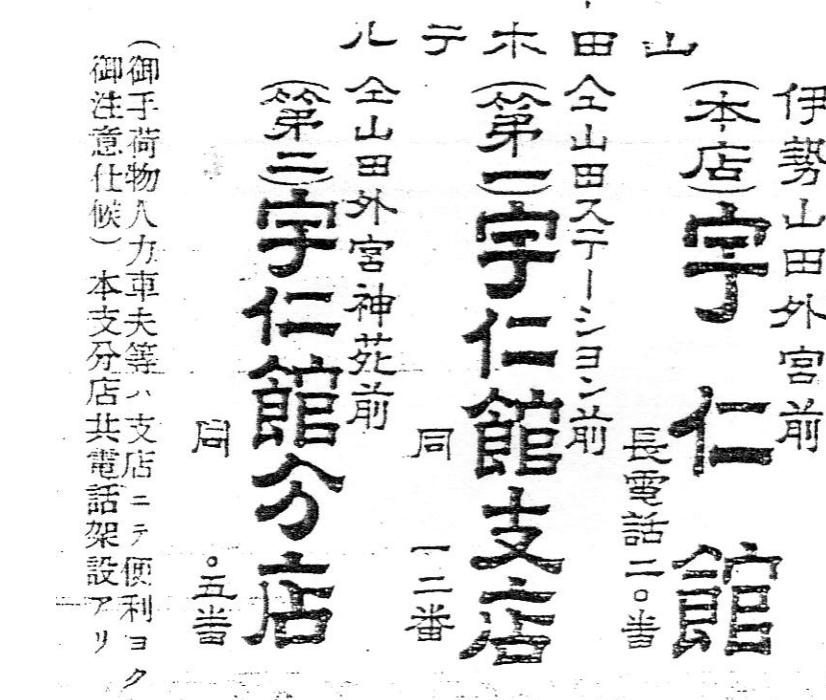
明44（と思われる） 伊勢案内図 別格信用旅館案内 神都十大旅館の内でも同じ、内容の広告があり、疑問が残る。

(上) 明34 御師講社 旅館案内 (下) 明44 伊勢案内図 別格信用旅館案内 神都十大旅館の内

明34 御師講社 旅館案内 (下) 明44 伊勢案内図 別格信用旅館案内 神都十大旅館の内

(上) 明34 御師講社 旅館案内 (下) 明44 伊勢案内図 別格信用旅館案内 神都十大旅館の内

明34 御師講社 旅館案内 (下) 明44 伊勢案内図 別格信用旅館案内 神都十大旅館の内



明35 外宮北御門以西の神苑工事着工 2,3旅舎(宇仁館、角屋神風館、もう一つは今橋屋か?)が撤去。

北御門前の宇仁館本店をこの頃、除却したものと思われるが、確定的な資料は見出していない。

明36 伊勢電気鉄道(市電)本町~二見間開通 関西参宮鉄道案内記に宇仁館本店として広告ページが掲載されている。駅前支店もあり、とあるので、この頃に山田駅前の支店が開業したと思われる。

明37 岡本町に建設された宇仁館が焼失、のち朱壁の構造に建替え

明38 市電が山田駅前~本町開通 この頃と思われる駅前の古写真にはすでに旅館群が形成されている。

明39 宇治山田市になる。

### 伊勢参宮案内記 神都の巻

「伊勢参宮案内記 神都の巻」には、新築落成 山田ホテル 一等旅館 外宮前 宇仁館本店 山田停車場前、同

支店」の広告が掲載されており、本文で、

「宇仁館(岡本町) もと参宮ホテルといつて随分名のある二層楼であつたが、去37年春、焼失し尽くされ、今

回再び、宏大な朱壁の構造に建替えられた。支店は停車場前の西洋館」、

という記述があるが、この「参宮ホテル」というのは誤記だと考えられる。前ページの広告を参照、あるいは他の資料でも、宇仁館は常に「山田ホテル」と称している。

また、三層楼であつたことから、移転を急いたためも有り、北御門前の宇仁館本家の建物を移築した可能性はあるか? 角屋神風館も龍大富邸に移転する際には旧建物の一部を移築している。同書掲載の広告には「新築落成」とあるので、焼失後、再建された建物の写真だと思われる。それは角地に立地しているため、明らかに岡本町の本店であるのにも関わらず、「外宮前」と称している。

(上) 明39 伊勢参宮案内記 岡本町本店 (下)ステーション前 宇仁館支店 (同年頃か?)

外宮前 宇仁館本店

## 新築落成 山田ホテル 一等旅館



西洋料理御調進



山田停車場前 同支店

明40 参宮鉄道が国有化、長距離電話開通 この頃、三日市旅館を宇仁館系列に取り込んだか?

明43 御幸道路完成

を経て、参詣の便は、これまでの宮川の渡しから筋向橋、北御門、古市、内宮という道筋から山田駅下車、外宮参道を通過して、一時的には岡本町、古市を経由、その後は市電経由、内宮へ至る道筋に変更され、山田駅前を中心に発展することとなつた。その結果、筋向橋、北御門、岡本町、古市の道筋は衰退していく。

明44発行と言われる伊勢案内図 別格信用旅館案内 神都十大旅館之内には、次の記述が見られる。

外宮前(本店)宇仁館 長電20

ステーション前(第二)宇仁館支店 電12

外宮神苑前(第二)宇仁館分店 電05

電は電話番号を示しているが、伊勢で長距離電話が開通したのが明40で、翌年には120回線が、大01には497回線が開通しているので、明44頃までに、旅館案内に電話番号が記載されるようになった

ここで「外宮前」、「外宮神苑前」というのは、どこなのかという疑問が、再び、生じる。神苑会史料によると、明35 外宮北御門以西の神苑工事着工2,3旅舎(宇仁館、角屋神風館など)が撤去、とあり、その頃には、北御門前の宇仁館本店を除却し、岡本町に新築したと思われる。また、この時期には、三日市旅館は宇仁館チーン旅館となっていたと思われる。また、宇仁館分店の「外宮神苑前」は豊川町や岩淵町を意味し、宇仁館分店は三日市旅館のことなのかも知れない。

さらに、電05が電105の誤記だとすると、その番号は大01宇治山田商工人名録では、宇仁館支店(豊川町)西田米太郎として使用されているので、そう理解するのが妥当ではなかろうか?

# 大正期の宇仁館

大01 宇治山田商工人名録によると、

宇仁館本店(岡本町) 西田周吉 電20長<360

宇仁館支店(本町) 西田米太郎 電12長

宇仁館支店(豊川町) 西田米太郎 電105

三日市大夫(岩淵町) 西田周吉 電326長

とあり、大01までは確実に、北御門前の本家は除却され、岡本町店は本店となつた。

また、駅前の支店は米太郎に任せられていて、三日市大夫次郎邸は、龍大夫と同様に、山田最大の規模を誇る、御師系旅館、三日市旅館として三日市家によって営業されていたが、後年、その経営を周吉が援助し、宇仁館系列に列挙されるようになつた。しかし、広大な三日市旅館は、敬神団体であった神苑会の事業の一つである明43の御幸道路整備完成によって、南北に分断され、北側(岩淵町)を三日市大夫、南側を宇仁館支店(豊川町)としたものと思われる。この豊川町の店の位置は岩淵町との町境であつたため、豊川町と称したのか、実際に豊川町であつたのか、確証する資料は見つかっていない。また、関連旅館を列挙すると以下のようになるけれども、まだ宇仁館系列とはなつていない。

大橋館(今在家) 多氣道郎 電338

松島館(支店)(本町) 松島庄太郎 電29長(大02 全国商工案内)には、駅前に支店 電420)

高千穂館支店(本町) 西村かつ 電15長、高千穂館本店(宮後町) 西村かつ 151

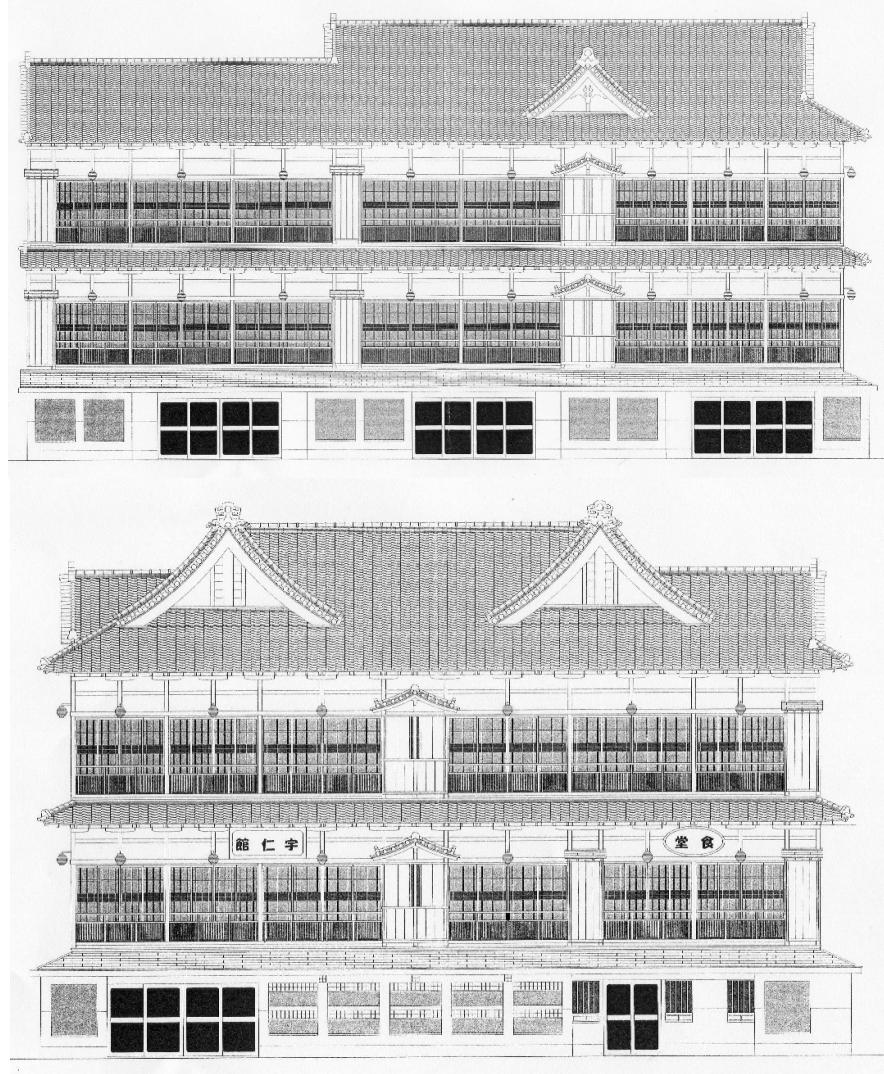
神風館支店(本町) 大泉忠生 電538、神風館本店(大世古町) 龍いを 長70

與可楼(八日市場町) 中岡助三郎 電21長

(上)駅前宇仁館支店が三層樓に改築 (下)神風館支店の建物がなくなり看板が掲げられた



一級建築士 濱口オサミ氏作図 (上)側面 (下)駅前正面



大02 西田貞助没64歳、周吉40歳 全国商工案内」には北村屋甚蔵の名があるが?  
大03 宇治山田商工人名録」には、次の記載がある。

宇仁館本店(岡本町) 伊勢山田旅館(資) 電20長/360  
宇仁館支店(本町) 伊勢山田旅館(資) 西田米太郎 電12長  
宇仁館分店(豊川町) 伊勢山田旅館(資) 電105  
三日市大夫(岩淵町) 伊勢山田旅館(資) 電326長  
神風館本店(大世古町) 伊勢山田旅館(資) 電70長  
神風館支店(本町) 伊勢山田旅館(資) 大泉忠生 電538  
高千穂館本店(宮後町) 伊勢山田旅館(資) 電151

高千穂館支店(本町) 伊勢山田旅館(資) 西村かつ 電150長  
とあり、この時期に経営を伊勢山田旅館合資会社とし、また、神風館本支店を龍いを・大泉忠生から、また、高千穂館本支店を西村かつから買収して傘下に加えたと思われる。駅前宇仁館支店が三層楼になった時、神風館支店は宇仁館支店が同じ建物に吸収された可能性がある。

松島館支店(本町) 松島庄太郎 電29長  
大橋館(今在家) 多氣道郎 電338  
與可樓(八日市場町) 中岡助三郎 電21長

大05 周吉は豊宮崎文庫を收藏して(株)志勢共同魚商会を大正5年設立し社長となる。この豊宮崎文庫はのち宇仁館別荘宮崎文庫となる。

大正後期には山田駅前の旅館街は外宮の門前よりも駅前に多く店舗を構えている。大正に入つて著しく発展し、二

階建てが主であったものが、大正半ば以降、三階建てに改築されて行つた。当初からのものも含めて大正末までの二階建ては宇仁館、松嶋館、大宮館、伊勢屋、などを数え、当時のキャッチフレーズに従えば、大廈高樓が軒を並べた、といえる。(平24伊勢市史)

大11 三重県商工案内本編+付録』のよると、

千秋楼(八日市場) 西田一雄電360／515

宇仁館(本店)(岡本町) 西田周吉 電20長／252  
高千穂館(支店)(本町) 西田周吉 電105長

三日市太夫次郎(岩淵町) 西田周吉 電326

神風館(岩淵町) 西田周吉 電511

大橋館(在家) 多氣道郎 電338長／920

記載はないが、別資料から以下はあったと推測した。

神風館支店(本町) 伊勢山田旅館(資) 電538

高千穂館本店(外宮前・宮後町) 電151

宇仁館支店(本町) 西田周吉 電12長

とあるが、西田周吉は伊勢山田旅館(資)の代表者として記載されたものでさられたものであろう。

この頃に、大世古町の神風館本店は廃業し、旅館三日市大夫の南側の宇仁館分店は『神風館(岩淵町)』と改称した。豊川町は現在と同様に岩淵町に編入されたと思われる。

また、八日市場の有名料理店、興可楼を中岡助三郎より買収し、千秋センシュウ楼と改称し、周吉の長男 西田一雄が管理した。伊勢山田旅館(資)とは別な個人管理かも知れない。

## 昭和初期の宇仁館

大11～昭04までに作成されたと考えられる「宇治山田市街図」では、以下の記載がある。

宇仁館(本店)(岡本町) 西田周吉 電20長／252

宇仁館支店(本町) 伊勢山田旅館(資) 電12長

神風館(本店？)(岩淵町) 西田周吉 電511

神風館支店(本町) 伊勢山田旅館(資) 電538

三日市大夫(岩淵町) 西田周吉 電326

高千穂館本店(宮後町) 伊勢山田旅館(資) 電151

高千穂館(支店)(本町) 西田周吉 電105長

宇仁館別荘(岡本町) 西田周吉 電843

(宇仁館別館) 藤屋(本町) 西田周吉 電221

神風館支店は本町にあると記載されているが、既に、宇仁館の建物に吸収されていると思われるので、宇仁館の建物

内にあつたのかも知れないし、神風館(本店?)（岩淵町）の取次ぎの電話番号であつたかも知れない。、  
藤屋については後述する。

昭02 商工名録には、関連旅館は以下の2つか記載がない。

大橋館(今在家町) 大橋館末昌 電425

松嶋館(本町) 奥野さい 電29

昭06 宇治山田商工案内によると、

宇仁館本店(岡本町)伊勢山田旅館(株) 電20長/252

宇仁館支店(本町)伊勢山田旅館(株) 電12長/356/538

宇仁館食堂(本町) 電1076・記載はないが前後からあつたはず。

宇仁館別館大橋館(豊川町) 電511・記載はないが前後からあつたはず。

三日市大夫(岩淵町)伊勢山田旅館(株) 電326

宇仁館別荘(岡本町) 電843・記載はないが前後からあつたはず。

(宇仁館別館)藤屋(本町)伊勢山田旅館(株) 電221/1246

千秋楼(八日市場)伊勢山田旅館(株) 電360/515

神風館支店(本町)の名称が無くなり、『宇仁館食堂』が併設された。また、高千穂館本・支店は昭05に北村甚平(元の経営者?)に譲渡されている。

昭09 西田周吉没、宇仁館チエーン店旅館は長男 一雄に継承された

昭11 伊勢參宮之図『宇仁館案内図』によると、

宇仁館本店(本町) 電12特長/538特長

宇仁館食堂(本町) 電1076/12229

宇仁館別館大橋館(岩淵町) 電511

三日市大夫(岩淵町) 電326

宇仁館別館神風館(外宮前)岡本町)電20特長/252特長

宇仁館別荘 西田一雄(岡本町) 電843

宇仁館別館藤屋(本町) 電221

宇仁館別館菊屋(本町) 電1060

宇仁館別館菊屋(本町) 電1273

宇仁館別館対岳閣(内宮前) 電986

千秋楼(八日市場) 電360/515

駿前の支店が本店に、外宮前)岡本町の本店が神風館に改称された。また、宇仁館別館大橋館(岩淵町)とあるが、三日市大夫(岩淵町)があるので、豊川町の町境が変わったか?

また、新規に、以前よりあつた吉野館を八木亥太郎より買収し宇仁館別館菊屋を、辻井幸次郎より買収した大宮館を宇仁館別館橘屋に、また、内宮前に、宇仁館別館対岳閣を開業している。  
昭11以後 戦前の記録は現在のところ、見出することはできなかつた。

## 戦後の宇仁館

宇仁館本店（豊川町28） 電12特長／20特長

西田一雄（本町186） 電252・・・食堂か？

西田一雄（岡本町332） 電843

千秋楼（八日市場町） 電360／515

宇仁館本店（豊川町28）の豊川町は誤記か？あるいは、戦災を受け駅前宇仁館は焼失したので、宇仁館別館大橋館（岩淵町＝豊川町の誤記？）を一時的に本店としたか？岡本町の旧本店は昭29には記載がないので、その頃に売却されていて、西田一雄（岡本町332）は宇仁館別荘を示すと考へる。

昭29 「三重県電話番号簿」によると、

宇仁館本店（本町） 電2121

西田一雄（本町） 電2020／2843

宇仁館伊勢会館食堂グリル（岩淵） 電3747

千秋楼（八日市場町） 電4820

昭31 西田一雄没、長男 正秀が継承したと思われる

昭32 伊勢商工要覧では、

宇仁館本店（本町） 西田一雄 電2121

伊勢山田旅館組合株（西田正秀） 電4820

昭41 「伊勢商工名鑑」では、終に、宇仁館の名称や西田姓の記載が皆無となり、榮華を誇った宇仁館も終焉を迎えたと考へられる。

## 2. 宇仁館別館神風館

神風館については、その成り立ちから紐解いていかねばならない。  
明34 神都名家集によると、大世古町の龍大夫について、以下の記事がある。

龍重光氏は明治4年、春木家に生まれる。同家は師職の中の名門たりしが、同師職中の門閥家を以て、聞ゆる龍大夫嗣子無きにより、明治5年に生まれてすぐ、2歳にして龍家の養嗣子となり、該家を継承す。幼きより学に遊び、明治24年東京に到りて、（中略）、この間は龍家の内政は実父に託せしも家政上の外遊を許さざると以て、家に帰り、自ら家政を理す。家固より富豪にして門閥、最も高きを以て、旧檀家を有すること最も多し。故に参詣所として旧檀家の輩を宿泊せしむるを職とせし、云々。

とあり、明04御師廃止以降は、「旅館 龍大夫」として、龍重光によって経営されていた。明13明治天皇が3回目の神宮参拝をし、龍大夫邸に宿泊した。その後、家政は継続していたが、時勢に感じる所があつて、後述のように明33～34頃、同旅館を大泉忠生に売却した。一方、同誌から、

大泉忠生氏は万延元年12月下中之郷に生れ、幼名を弥三郎と称す。父は和惣治。同町に於て、旅舎業を以て生業とせり。明治6年外宮前なる人長大夫の邸地を買収し、且つ、同町魚屋の建造物をも併せて新に家屋を建築し、同年該邸に移りてその業を拡張す。當時、師職名を受けて大泉忠大夫と称し、大麻及び暦本頒布としてえ毎年、四国地方へ出張せしが、（中略）、和惣治氏即ち忠生氏をして、その家を襲はしめ、次男熊三氏をして松村家の将に、断絶せんとするに際して之を繼がせめたり。明治27年隣地有瀧屋の邸を買収して、更に高い壯なる家屋を新築して、神風館と改称し、同時にその規模を拡張せり。明治33年外宮神苑地拡張の議起り、同館及び宇仁館始め外数戸の邸地を神苑内に編入せらるる事になるや大世古町龍大夫の邸宅を買収し、之と共に建造物の全部を挙げ

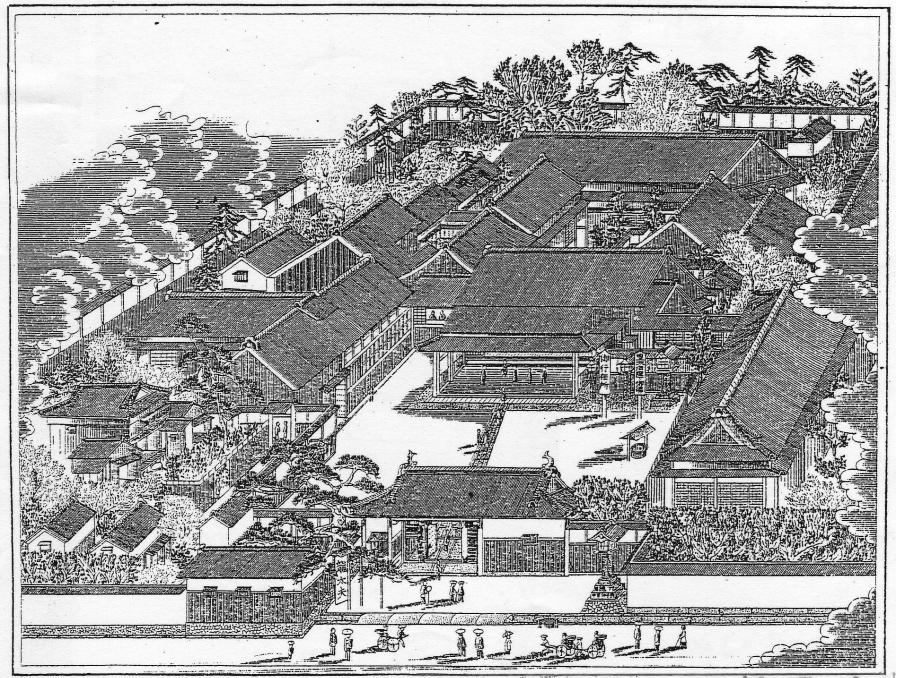
て、これに移転し、更に、輪奐の美を極め、善を尽して宏壯なる新築成れり。邸地2千有余歩、客室280に及び、幾千の旅客をして不便の感ぜしめるが如き、實に全国、稀に見る所の大旅館なり。全面に新旧二門あり。その廣闊なる大広間の如きは最も有名なるのにて、往年畏くも皇上陛下神宮参拝の折、行在所に充てされ、20年3月皇太后殿下御参拝の折も同邸に入御あり。これ實に同館の名譽たるは言を俟たず。これを以て見るも如奈に廣瀬にして且つ設備全きを得るやを知るに足るべし。（後略）

との記載がある。

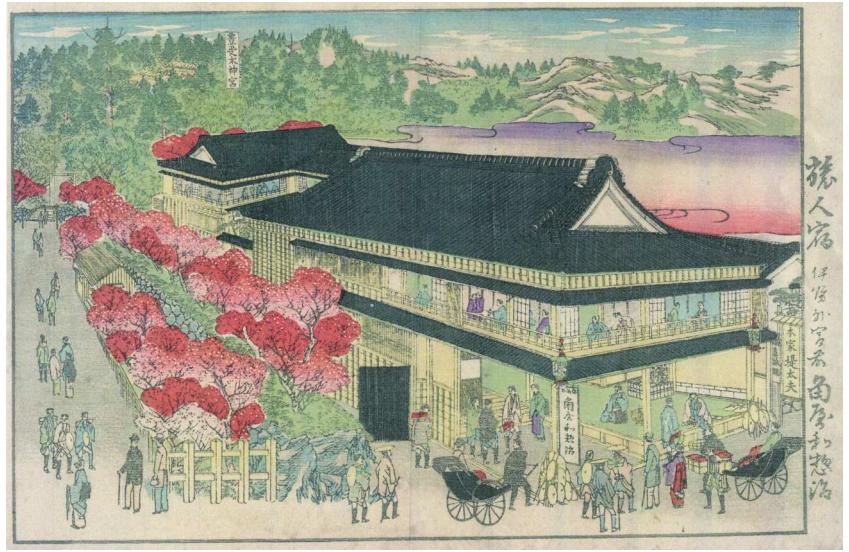
つまり、大泉忠生の父、角屋和惣治は明06に人長大夫邸（上館町のち、宮後町35番地）を取得し、旅館業を開始した。宇仁館と同様に、町宿系の旅館であり、機に乗じて御師株や御師邸を買収して、外宮北御門前で開業していた。大泉大夫名を継承した大泉忠生はその後、明27隣地（上館町36番地か？）の「有瀧屋」を買収して、家屋を新築して「神風館」と称し、さらに、平24伊勢市史によると、明28隣地（上館町33番地か？）に広大な旅館を新築し、「神風館」としたという。（飯田良樹氏「軒の角屋と神苑会」参照）。しかし、隆盛を極めていたに違いないが、宇仁館同様に、明35外宮北御門以西の神苑工事着工に伴い、移転を余儀なくされた。

余談ではあるが、その時、北御門前の神風館の玄関（↑部分）を移築したものと思われる。（平面図等参照）

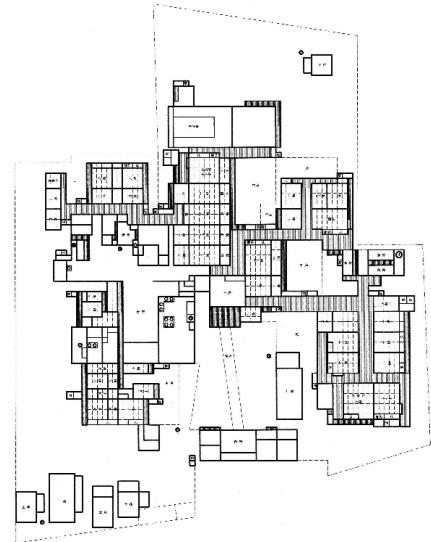
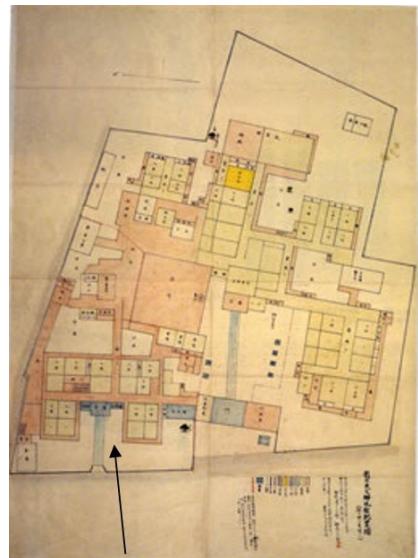
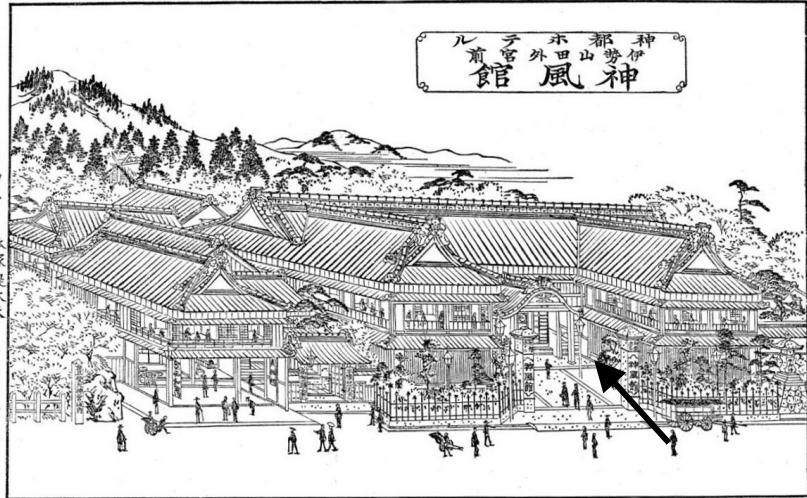
（上）旧龍大夫邸（現、大豊和紙工業株）（下）邸内にある明治天皇行在所遺址（明13）



(上)増築前の角屋 (下)増築後の神風館 左端の建物は上の建物と同じ



(上)移築前の神風館 (下右)元龍大夫邸平面図 (下左)同明33平面図 ↑部分が移築された部分



そして、宇仁館が山田駅前に支店を出店した直後頃に、角屋神風館は宇仁館の駅寄り隣に★神風館支店<sup>★</sup>を出店したものと思われる。★印は角屋神風館のシンボルマークだった。

明36 関西参宮鉄道案内記には、宇仁館の広告と同様に、伊勢外宮大世古町 ★神風館 山田停車場前 神風館支店<sup>★</sup>と掲載されていることより、宇仁館支店と同時期に支店を出店したものと思われる。各旅館の駅前支店の記述は同誌から見出すことができる。次ページの写真は、明38 市電が山田駅前～本町間を開通させてるので、その頃と推定できる。

大01 宇治山田商工人名録<sup>★</sup>には、この頃の神風館の経営者は、大世古町の本店は「龍いを」、支店は「大泉忠生」となっている。神風館は「龍重光」から龍大夫邸を買収したこととしているのに、「龍いを」が経営者として名を連ねているのが疑問はあるが?「一人には血縁関係があつたのかも知れない?」

大03 宇治山田商工人名録<sup>★</sup>には、神風館本店(大世古町)伊勢山田旅館(資)電70長、神風館支店(本町)伊勢山田旅館(資)大泉忠生電538、との記述が見られ、西田周吉はこの時期に経営を伊勢山田旅館合資会社とし、高千穂館本・支店をも含め、宇仁館旅館の系列化を開始したものと思われる。ただし、旧経営者を直ちに辞めさせることはしなかつたようだ。

大06 龍大夫邸を神都製紙が買収 この頃に「旅館 神風館本店」は廃業した。

大正中期には、山田駅前の旅館群の高層化が始まったものと思われる。宇仁館支店も絵葉書にあるように、豪華で偉大な三層楼となつたのはこの頃ではないか?

大11 三重県商工案内本編十付録「神風館(岩淵町)西田周吉電511、同誌に記載はないが別資料から、神風館支店(本町)伊勢山田旅館(資)電538、の記録があるので、大世古町 旧龍大夫の神風館本店は廃業し、その名前は、明43 御幸道路竣工で分断された三日市大夫次郎邸の南側半分の旅館名称に当てられた。

(上)宇仁館支店の右側後方に神風館支店、松嶋館が続く 左側は油屋支店

(下)山田駅歩方向に見た神風館支店 ★印の看板が見える 明42 第57回御遷宮奉祝記念?



なお、駅前の神風館支店は、絵葉書から、三層樓宇仁館支店に吸収され、看板が出された。全国規模の檀家がいた龍家を継承しているので、宿泊客はまだその名前を頼つたものと思われる。実際に、三層樓宇仁館支店の中に、神風館支店のエリアがあつたものか、岩淵町に新設した神風館への取次ぎだけだったのかは不明である。

大11～昭04までに作成されたと考えられる「宇治山田市街図」では、神風館（本店？）（岩淵町）（三日市旅館北側か？）西田周吉 電511 神風館支店（本町）電538 の記録がある。

昭06 宇治山田商工案内「記載はないが前後からあつたはずの、宇仁館別館大橋館 電511、があり、この頃に豊川町の神風館は大橋館に改称された。

昭11 伊勢参宮之図宇仁館案内図によると、駅前の支店を宇仁館本店とし、岡本町の旧本店を宇仁館別館神風館とした。この頃に宇仁館系列は最大規模となつた。これ以後、戦前の記録は現在のところ、見出すことはできなかつたが、神風館の名前は戦後には見出だせない。

#### （関連年表）

明06 角屋和惣治は人長大夫邸（上館町のち、宮後町35番地）を取得し、旅館業を開始

明13 明治天皇が神宮参拝（3回目）をし、龍大夫邸に宿泊した（行在所写真参照）

明治天皇は明02 伊勢路で（初回）、明05 海路で（2回目）神宮参拝をした。（二軒茶屋に記念碑あり）

明27 角屋は隣地（上館町36番地か？）の「有瀧屋」を買収して、家屋を新築して「神風館」と称した。

明28 宮後町の「角屋」は隣地（上館町33番地か？）に広大な旅館を新築し、「神風館」とした

明30 参宮鉄道が山田駅まで延伸 宮川電気が市内へ電力を供給開始

明33～34頃 大世古町の龍大夫邸を龍重光から買収し、新たな「神風館」として再建した。

明35 外宮北御門以西の神苑工事着工 2,3旅舎（宇仁館、角屋神風館、等）が撤去。  
明38 市電が山田駅前～本町間を開通

明43 御幸道路竣工

大01 宇治山田商工人名録「神風館支店（本町） 大泉忠生 電538、神風館本店（大世古町） 龍いを 長70  
大03 宇治山田商工人名録「神風館本店（大世古町） 伊勢山田旅館（資）電70長

神風館支店（本町） 伊勢山田旅館（資） 大泉忠生 電538

大11 三重県商工案内本編十付録「神風館（岩淵町）西田周吉 電511

記載はないが、別資料から、神風館支店（本町）伊勢山田旅館（資） 電538

大11～昭04 宇治山田市街図「神風館（本店？）（岩淵町） 西田周吉 電511 神風館支店（本町） 電538

昭06 宇治山田商工案内「宇仁館本店（岡本町）伊勢山田旅館（株）電20長／252

宇仁館別館大橋館 電511・記載はないが前後からあつたはず。

昭11 伊勢参宮之図宇仁館案内図「宇仁館本店（本町） 電12特長／538特長、宇仁館別館大橋館（岩淵町） 電511 宇仁館別館神風館（外宮前＝岡本町）電20特長／252特長

電511 宇仁館別館神風館（外宮前＝岡本町）電20特長／252特長

### 3. 宇仁館別館 藤屋（元、弥次喜多楼 藤屋）

藤屋は明40には尾上町にあつた記録はあるが、それ以後は大08「參宮案内」に駅前に「藤屋（弥次喜多樓）」との記載がある程度であまり情報はない。この藤屋は古市の古樓で東海道膝栗毛に弥次喜多が泊まつたと言われる「藤屋」であり、それを宇仁館が買収したものだと思われるが、詳細は不明である。藤屋は、駅前から外宮方面に向けて、宇仁館、松嶋館、西田周吉が創業した伊勢朝報社の次にあつた。昭和初期に宇仁館別館となつたと思われる。

藤屋は、十返舎一九の東海道膝栗毛で、弥次さん喜多さんが泊まつたと書き記された、江戸時代よりの老舗旅籠であった。古市尾上町62

文久元 藤屋利兵衛 主人

明30 參宮鉄道が山田駅まで延伸し、明33頃から駅前には旅館群が建設され始めたと考えられるので、宇仁館が支店を出店した頃に尾上町の店を畳んで、山田駅前に進出したように考えている。

明36、藤屋利七 主人

明40 富澤利七（改称）が経営

昭初期「宇治山田市街図」藤屋 西田周吉 本町 電221 この頃までに經營権が以委譲され、宇仁館別館となつたものと思われる。

昭10「電話番号簿 三重県 下巻」藤屋 旅館 本町 電221長/326（別館 三日市旅館と兼用）  
昭11「伊勢參宮之図 宇仁館営業案内」同別館藤屋 電221/326

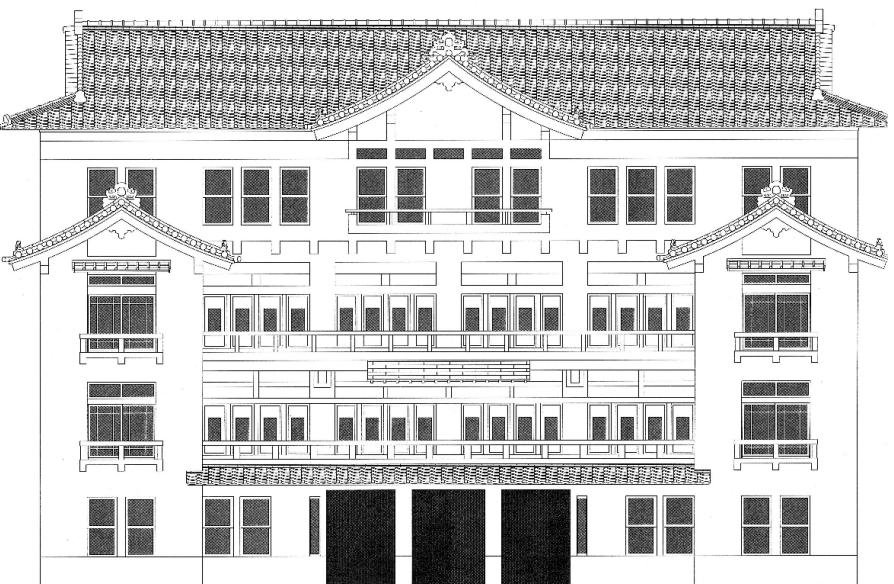
その後、終戦直前の空襲により灰燼に帰すまで、営業されたのではないだろうか？



(上)藤屋と右隣が明32新聞創刊した伊勢朝報社 (下)多分、伊勢朝報社を吸収して大きく改築された藤屋



(上)コンクリートのビルとなつた藤屋 (下) 一級建築士 濱口オサミ氏作図



## 4. 宇仁館別館 橘屋 (元、大宮館)

昭初期「宇治山田市街図」 大宮館 辻井幸次郎 本町 電593 この頃、創業したと思われる。

昭06「宇治山田商工案内」 大宮館 辻井幸吉 本町 電593 代替わりがあつたようだ。

昭10「電話番号簿 三重県 下巻」 橘屋 旅館 本(町)180 電1273

この時期以前に、本町の大宮館は宇仁館別館 橘屋 となつた。

辻井幸吉 旅館 大世古362 電593・大世古町で「辻井旅館」を開業した。

昭和11「伊勢參宮之図 宇仁館営業案内」 同別館 橘屋 電1273

その後、終戦直前の空襲により灰燼に帰すまで、営業されたのではないだろうか?

(上)大宮館 (下)宇仁館別館 橋屋



宇仁館別館 橘屋



5. 宇仁館別館 菊屋（元、吉野屋・伊勢屋）

大03 宇治山田商工人名録】 無商兼旅館 川木清三郎

大正初期に創業したものと思われ、当初は、伊勢屋旅館、吉野屋、魚清旅館は一体だったと考えられる。

大11 『重県商工案内』伊勢屋旅館、吉野屋、魚清旅館合名会社 本町、付表、八木儀一郎 本町 電616長  
大12 宇治山田市(地図) 佐伯館の駅より隣に吉野館、駅方向に小道を隔てて、魚清館、その前、外宮参道を挟んで向いに伊勢屋があり、3軒が併存していた。この時点までに、付属の門は取り壊ししたと思われる。

伊勢屋旅館（魚清）八木清三郎 電616、勢州館 八木清三郎 電なし  
これまでに、八木儀一郎から清三郎に代替わりがあった。

地図の配置では、佐伯館の隣に吉野館、その前、外宮参道を挟んだ向いに勢州館、駅寄りにかなり近く大宮館の隣に魚清館がある。伊勢屋は勢州館と変名している。

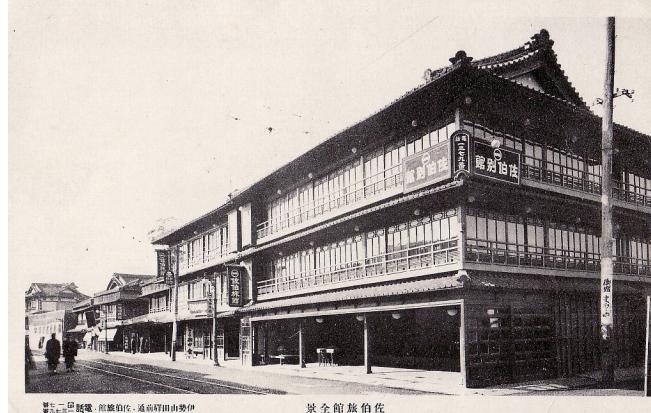
昭6 宇治山田商工案内」吉野館 八木玄太郎 電1060 伊勢屋 八木清三郎 電616  
昭10 電話番号簿 三重県 下巻」菊屋 電1060 本(町)178

となつた。吉野館が宇仁館別館 菊屋となり、八木清三郎 旅館 電616 本(町)175の記載が、この電話番号簿でなくなるので、八木清三郎は廃業したものと思われる。

昭和11 伊勢参宮之図 宇仁館営業案内」同別館菊屋 電1060

その後、時期ははつきりは判らないが、写真から、宇仁館別館菊屋は佐伯別館となつたが、終戦直前の空襲により灰燼に帰したと思われる。

(上)伊勢屋 (吉野館) (中)宇仁館別館菊屋 (下)佐伯別館 ……どれも同じ建物である



## 6. 宇仁館別館 三日市旅館

伊勢度会人物誌によると、

三日市大夫次郎こと、三日市清隱 別称 秀氏は、文政12～明治39 享年78歳 坂藤馬の長男で三日市左近の養嗣。山田三方職の一、内宮権禰宜に補し、従四位上に至った。代々、師職にて関東奥羽に多くの檀所をもつた。明治4年師職廃止後、旅宿を営みしが、旧縁を以て来宿するもの多く、多くの師職の絶滅したる中に、猶、其の名と家とを存して居る(後略)

岩淵町の三日市大夫次郎は、伊勢で最大の御師であったが、明治4年の御師廃絶により旅館に転向した。

明41～43 宇仁館チーン旅館になった可能性がある。明43 御幸道路竣工により邸地は分断され、

北側岩淵町は三日市旅館、南側豊川町は時により、神風館、大橋館、宇仁館本店に改名している。

明23 三日市大夫次郎 本家

明31～36 尊皇教会本部

明39～40 三日市大夫 三日市松心 三日市大夫次郎

明41～43 宇仁館チーン旅館になった可能性がある

明43 御幸道路竣工 三日市大夫次郎邸が分断され、北側を「三日市旅館」、南側を「神風館」と称す。

大01 宇治山田商工人名録」三日市大夫 西田周吉 岩淵町 電326長 明治末期には、西田周吉が経営。

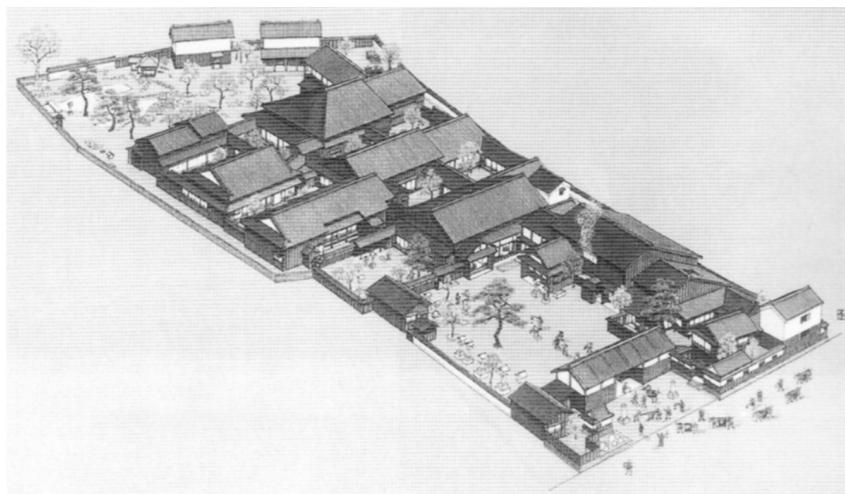
大03 宇治山田商工人名録」三日市大夫 伊勢山田旅館(資) 岩淵町 電なし

昭和11 伊勢參宮之図 宇仁館營業案内」宇仁館別館三日市旅館 電326(別館 藤屋と兼用)

その後、終戦前は営業を続けたのかも知れないが、終戦直前の空襲により灰燼に帰したと思われる。

(上) 分断前の三日市大夫次郎邸 上1／3くらいの所で分断された

(下) 昭13頃の三日市旅館 既に営業していないようだが？



## 7. 宇仁館別館 大橋館（元、神風館）と対泉閣

三日市大夫次郎邸の南側（豊川町）の場所であるが、名称が種々変化して判り難い。

明44? 別格信用旅館案内「神都十大旅館之内」大橋館 宇治橋際前 電338

大01 宇治山田商工人名録「宇仁館支店 西田米太郎 豊川町 電105

この宇仁館支店が、三日市大夫次郎邸の南側である。初期には単に支店と呼んだ。

大橋館 今在家町 多氣道郎 電338（多氣長大夫）

大03 宇治山田商工人名録「宇仁館分店 伊勢山田旅館（資） 豊川町 電105 支店が分店と呼ばれている。

大11 三重県商工案内本編・付録「神風館 西田周吉 岩淵町？ 電511

分店を神風館と呼んだ。住所も豊川町から現在と同様に岩淵町になつた。

電105は高千穂館支店で使用されるようになった。

昭初期 宇治山田市街図「神風館 岩淵町 電511

大橋館 多氣末元 今在家町 電425 経営者が、多氣道郎から末元に変更されている。

昭02 商工名録「大橋館（多氣）末昌 今在家町 電425 経営者が、多氣末元から末昌に変更されている。

昭05 伊勢参宮（案内）「宇仁館第二別館 電511 神風館が第二別館と改称された。

昭11 伊勢参宮之図「宇仁館営業案内」同別館大橋館 岩淵 電511

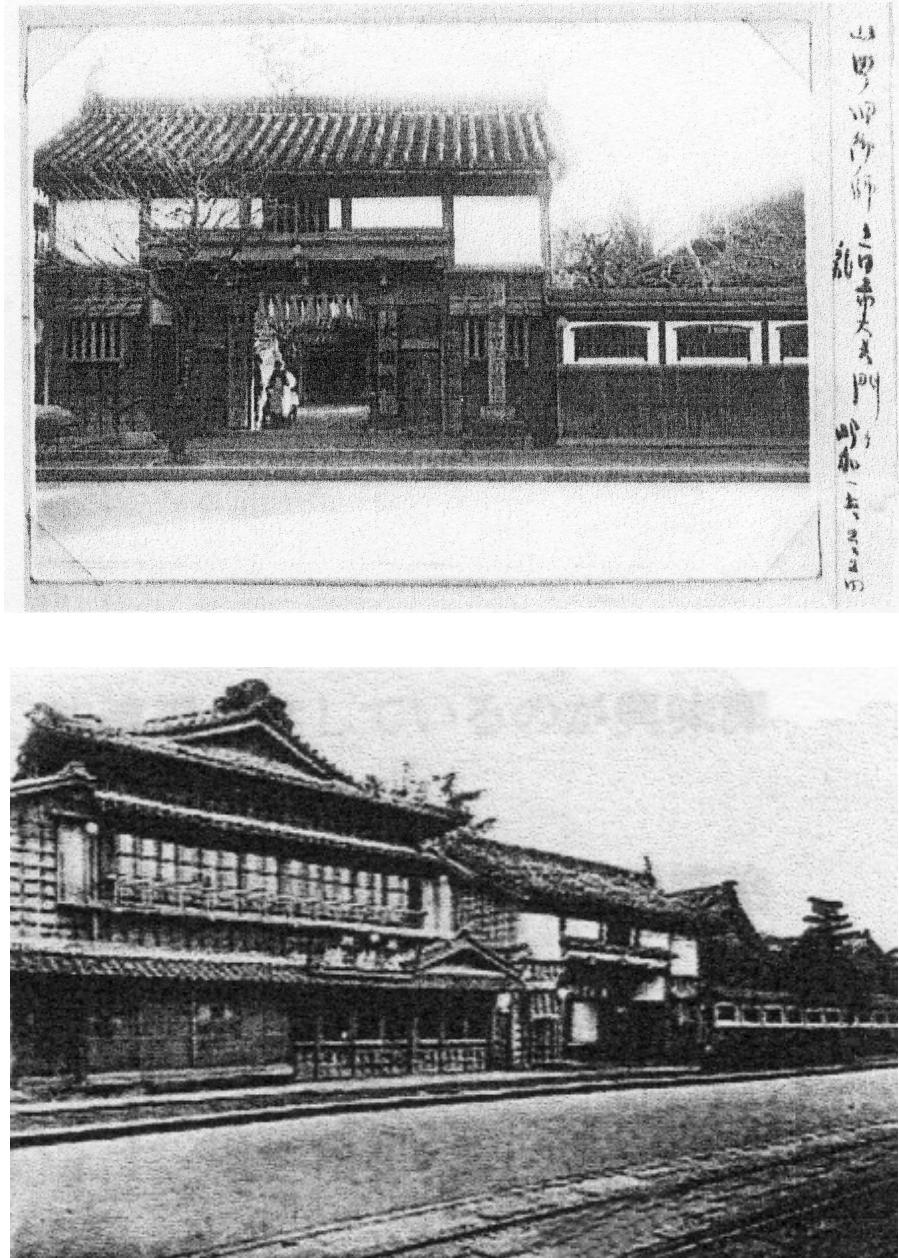
宇仁館別館 対泉閣 今在家町 電986

今在家町の大橋館を買収して、跡地を「宇仁館別館 対泉閣 今在家町 電986」とし、岩淵町の第二別館を「大橋館」と称した。その後、終戦直前の空襲により灰燼に帰すまで、営業されたのではないだろうか？

昭  
25

電話帳「宇仁館」本店 豊川町28 電112／20特長、西田一雄 本町186 電2552、岡本町3332 電843

この豊川町28が誤記なのか、戦火を免れ大橋館が焼け残つていて「一時的に本店」になつたものかは不明であり、今後の研究を待ちたい。1996に柴田氏が川端氏遺稿を転記した地図によると、旧宇治山田郵便局の道路を隔てた向かい、不動銀行があつた場所(豊川町)に「宇仁館」の記載があるので、この場所のことか?

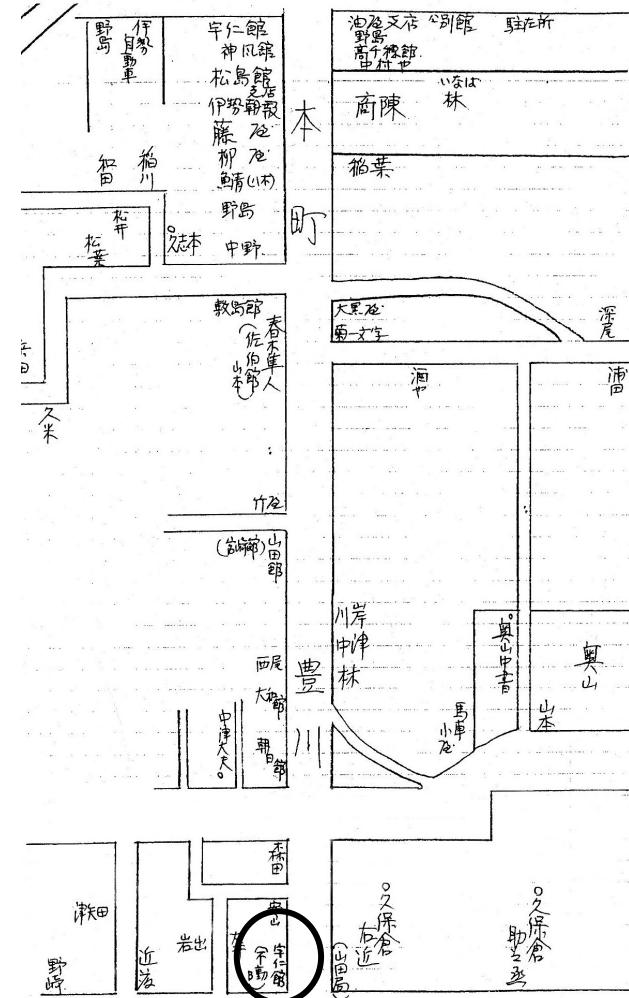


宇仁館分店(豊川町) ← 神風館(岩淵町?) ← 第二別館(豊川町) ← 大橋館(豊川町)

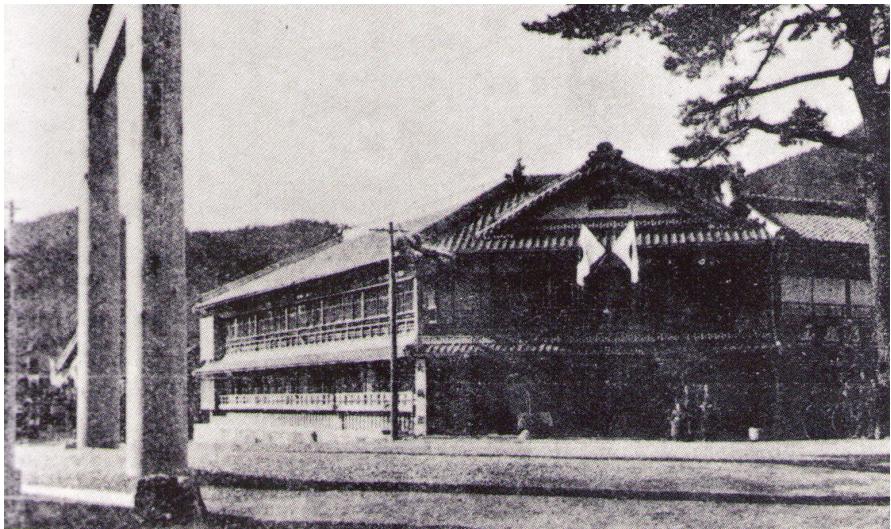
昭  
3  
2

伊勢商工要覽(宇仁館本店 西田一雄 本町電2121)

卷一百一十一



(上) 宇治橋前の大橋館 (下) 中之切のおこの上に移動した大橋館、その後、対泉閣と改称



## 8. 宇仁館別館 千秋楼（元、與可樓）

與可樓は中岡樓とも言つて、古くから高名な料理旅館であった。大正11年に、中岡助三郎から買収して、西田周吉の長男 一雄に經營を託した。昭和30年代までに、一雄の長男 正秀が引き継いだと思われる。現在、同地は駐車場となつてゐる。

神都名家集の中岡助三郎の伝によると、飯南郡松坂町、柿本利右衛門の五男にして、元治元同家に生れ、慶応3年中岡家の養嗣子となり、明治12年養父退隠に依りその家督を相続す。抑々、同家は四代前の主料理店を開業し、通称を中岡と云い、良からうと号す。先主の代に及び三宅家の旧宅を買収して家屋を増築せしより、倍々繁盛の域に進み、当主助三郎氏に至り、旧習を脱して最も開明的の料理法を選用せしより其の名声、愈々よいよ隆起し、神都屈指の料亭として、其の名をシン紳の間に号するに至れり。先年、有栖川宮殿下神宮御参拝として御来田あり。三日市大夫邸を御旅館に充てさせられし砌みぎり、御膳部御用を命ぜられ御思召に依り七五三のお料理を調進せしに殊の外御意に叶い(中略)、明治18年に亘りて、更に家屋を増築し、殊に多数の宴会に適すべき大広間を新設して、その必要に応ずる(後略)。

- 大03 宇治山田工人名録「與可樓 中岡助三郎 旅館・料理 八日市場 電21長  
大11 三重県商工案内「千秋樓 旅館料理 西田 一雄 八日市場 電360長/515  
昭06 宇治山田商工案内「伊勢山田旅館(株) 千秋樓 料理兼旅館 八日市場 電360長/515  
昭25 電話帳「千秋樓 八日市場 電360特長/515  
昭29 電話帳「千秋樓 旅館 八日市場 電4820/4821  
昭32 伊勢商工要覽「伊勢山田旅館(株) 料理 西田正秀 八日市場 電4820

千秋楼は興可樓の玄関部分を取り除いて改築していることが判る。(上)興可樓 (下)千秋樓



昭初期 宇治山田市街図

宇仁館別荘 西田周吉 岡本町 電843  
電話番号簿 三重県 下巻 宮崎文庫 岡本町 電843  
伊勢参宮之図 宇仁館営業案内

別荘 宮崎文庫 電843

昭25 電話帳「西田一雄 岡本町 電843

## 9. 宇仁館別荘 宮崎文庫

前述したが、昭9初版「伊勢度会人物誌」には、周吉の父、貞助が、宮崎文庫の火に重要書類を取出すとの事蹟があり、また、周吉の経歷の中に、「豊宮崎文庫を収藏して」とあるので、貞吉の時代に「豊宮崎文庫」を取得していた可能性がある。同文庫についての記録は以下の通り。戦後、昭和25年前後までは西田家が管理していたと思われる。同地は古来より桜の名所として知られている。近年には伊勢郷土資料館が建っていたが、どのような経緯があつたのかは、わからない。



# 10. 高千穂館本店と支店

明44? 別格信用 旅館案内 神都十大旅館の内」高千穂館本店 外宮前 電151 山田駅前高千穂館 電150

高千穂館本店は元、北村屋といい、北御門前の角地にあつたが、神苑整備区域に入らなかつたために、移転されなかつた。明治期までは、北村甚蔵(襲名してるように)幸福大夫、北村長太郎などの記載が見受けられる。

大01 宇治山田商工人名録」高千穂館本店 西村かつ 宮後 電151 高千穂館 西村かつ 本町 電150

北村甚蔵から西村かつに代表者が変更されている。

大03

宇治山田商工人名録」高千穂館本店 伊勢山田旅館(資)宮後 電151

高千穂館 伊勢山田旅館(資)西村かつ 本町電150

宇仁館系列の伊勢山田旅館(資)に経営権を譲渡したようだが、西村かつは伊勢山田旅館(資)に雇われたの

だろうか? 代表者が西田周吉であった時も宇仁館系列であるという表現はなかつた。

大11 三重県商工案内本編・付録「高千穂館 西田周吉 本町 電105長 高千穂館本店 外宮前 電151

高千穂館支店 山田駅前 電150

昭05 伊勢参宮(案内)「高千穂館 駅前と外宮前 館主 北村甚蔵 電105特長/151

経営権を北村甚蔵が西田周吉より買い戻したか?

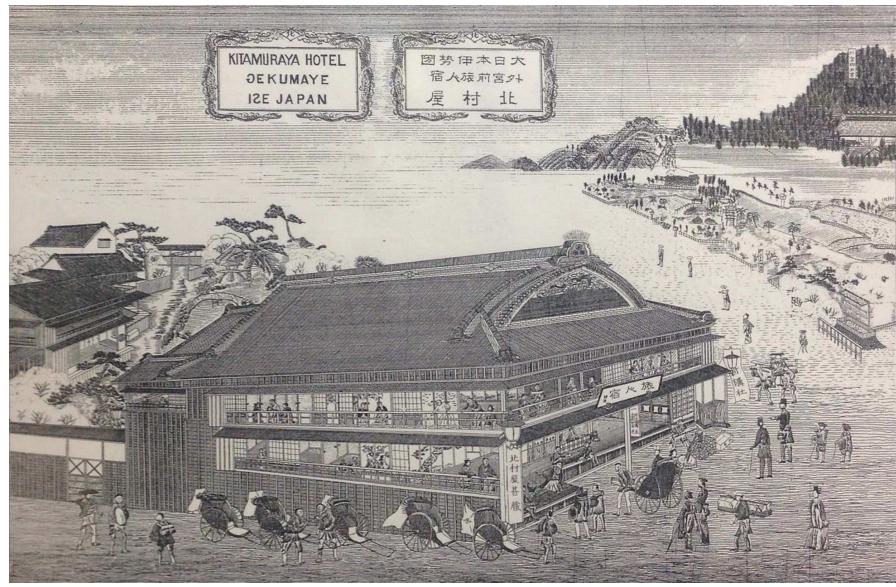
昭10 電話番号簿 三重県下巻「高千穂館 北村甚蔵 旅館食堂 本町 電1256

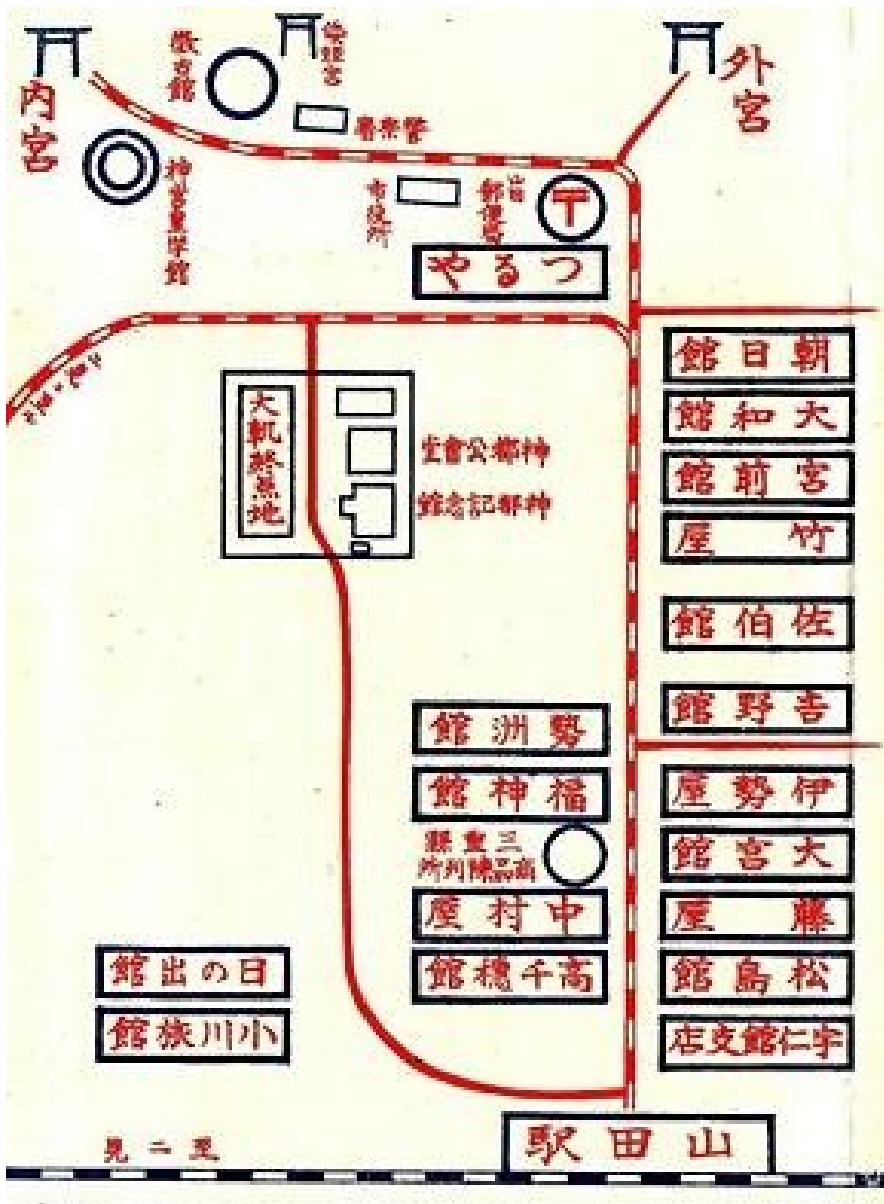
昭25 電話帳「高千穂館食堂 本 183 6 電1256

昭29 電話帳「高千穂館(資)飲食 井上宇助 本町 電3256

経営者が変更されている。駅前の高千穂館は記憶にある。電話番号はこの頃にプラス20000された。

(上)高千穂館本店 明治初期 (下)高千穂館本店 昭和期?





昭05 参宮案内(山田駅前通旅館連盟組合発行)



(上) 駅前 高千穂館 大正初期 (下) 駅前 高千穂館 末期

## 参考1. 伊勢朝報社

同社に関しては、西田周吉の略歴には、明32に新聞を創刊した「伊勢朝報社」の社長であったと記されているが、周吉の父、貞吉が社長であった時期もあつたようである。



明32 伊勢朝報社新聞を創刊

大01 宇治山田商工人名録「伊勢朝報社 西田貞助 本町 電102

大03 宇治山田商工人名録「伊勢朝報社 代表者名なし 電102

昭初期 宇治山田市街図「伊勢朝報社 岩淵町 電102/933

昭10 電話番号簿「三重県 下巻」「伊勢朝報社 岩淵町 電102

その後、終戦まで営業されたのではないだろうか？この地区は終戦直前の空襲に被災しなかつたと思われる。

昭25 電話番号簿「神都印刷（株） 岩淵町 電102

神都印刷は、現在でも営業しているので、伊勢朝報社はその場所にあつたのではないか？

（写真）藤屋の右隣り（駅寄り 松嶋館の左隣り）にあつた「伊勢朝報社」

## 参考2. (株)志勢共同魚商会

豊富崎文庫を収蔵して、(株)志勢共同魚商会を大正5年設立し社長となる、と周吉の略歴に掲載されているが、大01 宇治山田商工人名録」に既にその名が見られる。大12 宇治山田市（地図）の同じ電話番号からは、「の字に中 魚問屋」が見つけられるが、会社名のみ変更し、終戦まで継続したのではないか。戦後は、山田魚商業協同組合」が同じ電話番号を使用しているが、同業を継続していたと思われる、その詳細は調査していない。

大01 宇治山田商工人名録「(株)志勢共同魚商会 魚問屋 河崎町 電3224

大12 宇治山田市（地図）への字に中 魚問屋 河崎町 電3224

昭06 宇治山田商工案内「伊勢山田旅館（株）への字に中 魚商会 魚市場河崎町 電3224

昭10 電話番号簿「三重県 下巻」への字に中 魚商会 河崎町 電324長

昭25 電話帳「山田魚商業協同組合 河崎町 電324

# 宇仁館旅館の終焉

1934昭09、西田周吉が62歳で亡くなると、宇仁館旅館チエーンは長男一雄に引き継がれた。戦火による大きな打撃もあつたけれども、戦後の伊勢の観光業は高度成長期の旅行ブームや修学旅行に恩恵を受けて、大いに繁栄したのではないかと思う。ただ、本書冒頭の掲載した写真のごとく。宇仁館は、昭和30年代にやや低迷の様を見せ始めるよう感じ。昭32伊勢商工要覧では、駅前本店と食堂がメインでチエーン旅館は既にない。千秋楼は一雄の長男正秀に託されている。本町以外の記載住所は岡本町や岩淵町(伊勢会館食堂グリル)が見られるが、岡本町の実態を把握するには至っていない。

1956昭31、一雄も60歳で亡くなるが、昭41伊勢商工名鑑では、終に、宇仁館の名称や西田姓の記載が皆無となり、栄華を誇った宇仁館も終焉を迎えたと考えられる。

## 年表

- 1861文久01 宇治郷之図「宇仁館大夫」の記載
- 1849嘉永2 西田貞助生まるる
- 1864元治7慶応 山田師職銘監に「宇仁館太郎大夫・石井源大夫」、師職名「宇仁館芳之助」の記載
- 1869明02 第55回式年遷宮 明治天皇神宮に初参拝 東京行幸途中陸路
- 1871明04 御師制度が廃止
- 1872明05 天皇陛下両宮参拝(2回目)海路 宮崎文庫に宮崎郷学校開設 角屋和惣治 人長大夫邸を取得
- 1873明06 西田周吉 生まれる 大世古町 龍大夫邸にて博覧会開設角屋和惣治が人長大夫邸を取得
- 1875明08 西田米太郎 生まるる
- 1876明09 旅籠屋取締規則の眞令發布
- 1879明12 旧師職総人名其他取調帳に「平民 宇仁館たけ」の記載
- 1880明13 「新講社」広小路うに館太郎の案内 明治天皇神宮参拝(3回目)陸路 龍大夫邸宿泊
- 1883明16 尾上町旅館十五楼が勅使斎館に定められる
- 1886明19 神苑会創設
- 1887明20 賓日館開館 皇大后御宿泊
- 1888明21 神苑開設のため、両宮付近の民家の撤去工事開始
- 1889明22 初回町会議員選挙
- 1890明23 太田小三郎等参宮鉄道株式会社創立 三重県名所図会 三日市大夫次郎 旅館として営業
- 1893明26 三重県下商工人名録
- 1894明27 日清戦争開戦 神苑会より既成神苑(内宮宇治橋内と外宮の鳥居前)を神宮へ献納

角屋は隣地「有瀧屋」を買収して新築し「神風館」と称す

1896 明29 西田一雄 生まれる 宮川電気株式会社創立

1897 明30 神宮の三祭典の時、忌物を神宮正殿に納める壺型土器を神宮に調進する場所が宇仁館のみとなる。参宮鉄道が山田駅まで延伸 宮川電気が市内へ電力を供給開始 伊勢たより参宮案内」

西田周吉 隣地に客室70余を有する洋風の建物を新築 自家発電による電灯を点灯

1898 明31 政治団体「神都公同会」貞助ら結成 伊勢新聞商工登記公告に宇仁館代表者周吉、住所が記載

1899 明32 伊勢朝報社 新聞創刊 修学旅行の鉄道団体割引始まる

1900 明33 山田駅前・外宮間の新道開通 五三会ホテル開業 龍大夫(旅館)大泉忠生が取得

1901 明34 貞助 私立宇治山田幼稚園発足 周吉 宇治山田市会議員当選(28歳) 神都名家集「

宇仁館は岡本町に本店を新築か?

1902 明35 外宮北御門以西の神苑工事着工 2,3旅舎が撤去

1903 明36 本町(二見間開通 関西参宮鉄道案内記)

1904 明37 [日露戦争開戦] 岡本町に建設された宇仁館が焼失、のち朱壁の構造に建替え

1905 明38 山田駅前(本町開通 駅前には旅館群が形成か?明治天皇 鉄道にて神宮参拝(4回目)

1906 明39 宇治山田市になる 内宮(浦口)まで延伸開通 伊勢参宮案内記「宇仁館分店の記述

三日市大夫 三日市松心 三日市大夫次郎

1907 明40 内宮・二見間開通 参宮鉄道国有化、長距離電話開通 五二会館は大日本ホテル山田支店に

〔三重原案内〕 藤屋(尾上町)富澤利七が経営

1908 明41 遊郭貸座敷業が営業は古市22軒、山田29軒、神社10軒、この頃、三日市旅館 宇仁館系列に

三日市大夫 三日市松心 三日市大夫次郎

1910 明43 御幸道路開通 三日市旅館が南(豊川町)・北(岩淵町)に分断

1911 明44 参宮鉄道鳥羽まで延伸開通。神苑会の土地建物 一切を神宮に献納し解散

伊勢案内図 別格信用旅館案内「神都十大旅館の内」大橋館 宇治橋際前

1912 大01 宇治山田商工人名録「神風館は本店 龍いを、支店 大泉忠生、高千穂館本店 西村かつ

伊勢朝報社 西田貞助(株)志勢共同魚商会 魚問屋 河崎町

1913 大02 西田貞助没 享年64歳 全国商工案内

1914 大03 第一次世界大戦開戦 宇治山田商工人名録「経営を伊勢山田旅館合資会社とし、神風館本支店

を龍いを・大泉忠生から、高千穂館本支店を西村かつから買収して傘下に「興可樓」中岡助三郎  
〔三重県商工案内本編+付録〕「興可樓」を中岡助三郎より買収し千秋楼と改称 神風館本支店廃業

1915 大04 西田周吉 豊宮崎文庫を収蔵して「株」志勢共同魚商会を設立

1916 大05 西田周吉 〔三重県商工案内本編+付録〕「興可樓」を中岡助三郎より買収し千秋楼と改称 神風館本支店廃業

1920 大09~1924 大13 周吉 宇治山田市市会議長に就任

1921 大10 西田米太郎 死亡 享年46歳

1923 大12 西田周吉 県会議員議長に就任

1924 大13 西田正秀 生まれる

1927 昭02 「商工名録」この頃、藤屋は宇仁館別館藤屋となる(宇治山田市街図) 日本の金融恐慌始まる

1930 昭04 宇治山田市史出版 [世界恐慌]始まる

1930 昭05 神都博覧会開催 本・支店は北村甚平に譲渡 昭和恐慌

1931昭06 宇治山田商工案内「神風館支店（本町）の名称が無くなる、宇仁館食堂が駅前宇仁館支店に併設

豊川町 神風館は大橋館に改称 大宮館 辻井幸吉 吉野館 八木玄太郎

満州事変勃発

1934昭09 西田周吉没 享年62歳

1935昭10 神都に於ける交通線の変遷と地域性の推移」伊勢朝報社への字に中 魚商会

大宮館 宇仁館別館 橋屋 吉野館が宇仁館別館 菊屋となる 宇仁館別荘 西田周吉 岡本町

1936昭11 伊勢参宮之図「宇仁館案内図 駅前の支店が本店に、岡本町の本店が神風館に改称

吉野館を八木亥太郎より買収し宇仁館別館菊屋、大宮館を辻井幸次郎より買収し宇仁館別館橋屋に、内宮前に宇仁館別館対岳閣を開業

宇仁館別館三日市旅館 豊川町が岩淵町に編入か？神風館を大橋館と改称か？

1937昭12 日中戦争始まる

（史料が見いだせない）

1941昭16 太平洋戦争開戦

1945昭20 空襲で伊勢の中心市街地の半分余が焼失

終戦

1950昭25 『三重県電話番号簿』宇仁館別荘 西田一雄 岡本町 高千穂館食堂を併設 山田魚商業協同組合

1954昭29 『三重県電話番号簿』高千穂館 井上宇助 この頃、電話番号は20000をプラス

1956昭31 西田一雄没 享年60歳

1957昭32 「伊勢商工要覧」西田正秀 八日市場

1966昭41 「伊勢商工名鑑」宇仁館の名称や西田姓の記載が皆無

2004平16 西田正秀没 享年80歳

## あとがき

明治時代の伊勢に興味を持ち、史実を知りたいと考えて10年余か？その間に、絵葉書収集を趣味として ブログ いにしえの伊勢」に発表している名古屋在住の山田修司氏や伊勢の版画を主に収集研究している津市在住の飯田良樹氏、伊勢古市参宮街道資料館館長の世古富保氏、元皇學館大学の千枝大志氏、山田奉行所記念館館長の辻村修一氏、皇學館大学文学部の谷戸佑紀氏、伊勢河崎商人館事務局長の西城利夫氏、旧御師丸岡宗大夫邸保存再生会議の丸岡正之氏、国際日本文学研究センター教授のジョン・ブリーン氏など多くの専門家と知り合い、ご指導ご鞭撻のお陰を以て知識の幅も広がり、同好の話を肴に「一献、楽しむのも、残された人生の最高の喜びとなつた。

考えはさらに進化して、歴史を知ることは将来を知ることではないかとの確信を得るようになつて、シャツジャー街と化してきている郷土伊勢が、再び、賑やかさを取り戻すために何をすべきを考えるようになつてきている。それらの活動をしていると、それに関心がある方と大いに知り合える様になり、それを肴に「一献が、またまた進む。単に、樂しく呑みたいだけではあるけれども、自分の活動が、郷土の将来に多少なりとも貢献できれば、この上ない喜びとなる。最近では、まとめた事項の講演を依頼される」ともあり、宦官の至りではあるが、少しは郷土に恩返しが出来ているようにも思う。

このような中で、伊勢の旅館に関しては、栄枯盛衰が激しく、新資料が発見される度に、あつた場所の特定やら、経緯などを議論することが多い。そのためにその中核となつた「宇仁館」を中心まとめてみるとしたが、資料は少なく、同時に調査していた「電話番号の推移」と合わせ、論じれば、正確さを保持できるのではないかと考えたのがまとめるきっかけとなつた。今後の調査の一助になれば幸いである。

## 筆者紹介

昭和23年伊勢市大世古町に生まれ、昭和47年慶應義塾大学工学部電気工学科卒業後、日本ビクター株式会社勤務し、レコード、ビデオディスク、DVD、記録ディスクなどの開発に携わり、退職後、技術コンサルタント会社を起業、現在に至る。実家の掛軸を受け継いだことから、その調査を経て、伊勢の近代史を研究するに至った。

著書、伊勢度会近世名軸図鑑、伊勢参宮近世名所図会、御師大研究などの自主製作本は三重県図書館や伊勢図書館に収藏され、閲覧できる。研究結果は、ホームページ <http://nfc.no.coocan.jp/index.htm> でも公開している。

平成30年 2018年8月吉日発行

11-259-1206 神奈川県平塚市真田3・10・18

著者 兼 発行者 秋 田 耕 司

メールアドレス: koji.akita@nifty.com

印刷・製本 有限会社 N F C 技研